
ファンタシースターポータブル2「小さな翼と歩く悪意」

ジュラルミンダンボール

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ファンタシースターポータブル2「小さな翼と歩く惡意」

【NZコード】

N1204T

【作者名】

ジュラルミンダンボール

【あらすじ】

ハロー・ハロー・人類諸君。SEEDが消え去つてメデタシメデタシつてならなくて残念だつたね人類諸君。ところで人類諸君。完全に人の形をして、人のように感情を持ち、人に紛れて人のように暮らすSEEDがもしも居たとしたら人類諸君。人類諸君は、どうするね？

第一話「死にたいわけじゃない。」（前書き）

やつちまつた！ なんてこつた！ まあ良いか。そういうワケでまさかの連載一本目投下です。ファンタシースターポータブル2の主人公がもしも××××だったら？ という内容のお話です。とりあえず主人公のプロフを。

名前：リア・ゲート

性別：女性

種族：ヒューマン（？）

年齢：27歳

身長：174Rp

体重：62Kv

タイプ：レンジャー

服装：上下共にストーリアの黒黒

その他：髪は少し短め。肌が色素が無いかのように白い。瞳は黄色と言つより金色で、白目が黒い。左目を眼帯のようなヘッドマウントディスプレイで隠している。

程よい大きさと良好な形をしている。

第一話「死にたいわけじゃない。」

「あらあら、随分と人が多いのねえ。」

海底レリクスにて。実力さえあれば誰でも可との事だつたので来てしまつた。面接の後の抜き打ちテストといつ名の不意打ちに手荒く対処してしまい、随分とひどい怪我をさせてしまつたのが悔やまれる。とりあえずは狙い通りに、簡易携帯食の配給が配られる。適当な場所に腰掛けで配給を食べていると、不意に声を掛けられる。そこそこ身長の高い、男性型のキャストのようだ。

「よつ。所属無しつて事はフリーか？」

「ええ、まあ。」

「そうか。それは大したモンだ。場所が場所つてだけに腕利きを集めているのかもしねんな。」

「そうですねえ。このレリクスは最近見付かったモノ、だそうです
ね？」

「ああ。発見されたのはごく最近で、この辺りまでは安全なようだが、奥は正に未開の地つてワケよ。久しぶりに儲けが出そうだな。「ん~、でも人数が人数ですし、山分けつてなると少し心配ですねえ。何人か殺しておいた方が・・・」

「おいおい、冗談でもそれは止めておけよ？　ここは未開のレリクスなんだ、何が出るか分かつたモンじゃない。まあ、放つておいても何人か死人も出るんじゃないかな？」

といつた具合の不謹慎極まりない話題で盛り上がりつていると、少し離れた所から高くて幼い感じのする、女の子の声が聞こえてきた。

「帰ろう！　帰ろうつて！」

男性キャストが後ろの方で駄々をこねている女の子の方を見る。

「なんだ？　あの子供は？」

「さあ？　実戦未経験にしか見えませんけれど・・・？」

女の子が駄々をこねている相手はそことその体格を持つ、ロング

「マークの男性だつた。

「「ひるせえ！ 今からお前向けの仕事を取つてきてやるから、マークを動くんじゃねーぞ？」

そう言つと、男性は女の子を残して行つてしまつた。

「あらあら。こんな所に女の子で一人にするなんて。」

「確かに、あまり気分の良い光景では無いな。まあ、不謹慎極まりない話をしていた我々にどうこう言える話では無いかもしけんが。と、その時。突然大きな地震が起つた。そして出入り口が徐々に閉まつていく。私と男性キャストは出入り口に近い場所に居た。しかし女の子は大分遠い場所に居る。しかもあるう事か頭を抱えて座り込んでいる。これはマズイと思い、女の子に駆け寄つて肩に抱き上げて走る。

「ふえ！？ ちょ、あのー！」

「あ、暴れないで！ って、うわあ！？」

女の子が暴れた拍子に床の「ボコボコ」に躊躇して転んでしまつた。お陰で扉が閉まるまでに外に出る事が出来なかつた。むつくりと起き上がりながら女の子に話しかける。

「いつた～い・・・なんで暴れたの～？」

「だ、だつて・・・」

そう言つて顔を赤くしながらもじもじと裾の方を若干引っ張つている。

あ、なるほど。そういうえば慌ててたせいで抱きやすさ重視のお尻が前に来るスタイルで抱いていた。これはつまり、扉の辺りに居た人達から見れば「おパンツですよ！ 少女のおパンツですよー！」と言わんばかりのスタイルになつてしまつっていたわけだ。

淑女たるものそこまでキッチリ考えて動かないとね。いやあ反省反省。

「あらあら、ごめんなさいね～？ あ、私はリア・ゲート。あなたのお名前は？」

「え、エミリア。エミリア・パーシバル。って言つたか、今のこの状

況つて・・・

「ええ。閉じ込められちゃつた～って状況ね。まあ扉は開かないモノと割り切りましょう。」

「割り切つて～・・・で、どうするの？」

「お尻を無意識にぱんぱんとはたきながら立ち上がり、言った。
「先に進んでみましょう？ もしかしたら、別の出口から出られるかも知れないもの～。」

「え、ええ！？ 先に進むの！？ あ、危なくない？」

「ん～、そうねえ～。きっと危ないでしょうねえ～。ま、でも、死んでしまったその時はその時、所詮はそこまでの命だつたって事で、良いんじゃないかしら？ それに・・・」

そこまで言つて、愛銃のショットガン、違法改造が施されたシッガ・デスターをナノトランスさせて手元に呼び出し、それを右手だけで持つてエミリアの頭に突き付ける。

「伏せなさい！」

「ひうっ！？」

エミリアが頭を下げるとき同時に引き金を引く。後ろに居たエビルシャークの上半身がアゴと腕のみを残してバラバラに吹き飛ぶ。撃つた反動を利用して銃を手元に引き寄せて左手でポンプアクションを行い、エミリアが居る側の反対から、私目掛けて飛び掛ってきたエビルシャークに向かつて再び発砲する。

上半身と下半身が強力な力で無理矢理捻じ切られたソフトビニール人形のようにいびつに千切れで分かれ、吹き飛ぶ。

「す、すご～・・・。」

「ここにはもう安全地帯じゃ無いのよ～。ここに留まっていると、こうじう品の無い方々がわざわざ来る可能性も高いの。だから少なくとも、移動は行つべきだと思つわよ～？」

「う、うん。分かった。って言つたか、あんたと一緒に居る事にするから！」

「あら～？」

「だつて、あんたと一緒になら何とかなりそうだし！」

「あらあら～。それじゃ、張り切つて行きましょうか～。」

「ん～、多いわね～。ちょっと疲れて来ちゃったわ～。この子もそろそろメンテナンスしたいし・・・。」

連續で既に50体近くを討伐している。いい加減に疲れて來たし、それにシッガ・デスターの銃身も焼けて來た。そろそろメンテナンスが必要そうだ。

と、エミリアが不思議そうな顔で質問をしてくる。

「あれ、シッガ・デスター・・・つていうかテノラの製品つて耐久力が高い事がウリじゃなかつたっけ？」

「あらあらよく知ってるのね～？　そうなのだけど、この子は私がアレンジを加えてあげた特製だから、耐久力が著しく低くなっちゃつてるのよ～。その代わり、普通のシッガ・デスターなら片手撃ちなんでしたら肩が外れちゃうけど、この子なら多少は平氣だし、破壊力は・・・まあお察しの通り高いしね。」

「ふ～ん。ねえねえ、ちょっと貸して？」

「良いわよ。はい、どうぞ。」

周囲に目を軽く走らせながらエミリアに渡す。

手に取り、隅々まで観察するエミリア。その眼はまるで、他社の武装の研究を行つてゐる技術者のように鋭くそれでいて好奇心に溢れていゐる。

「ふ～ん、なるほどなるほど。緩衝装置の全長を伸ばして反動を小さくしつつ、広がつたリアクターのスペースにもう一つ、ハンドガン系のリアクターを積んだのね。どうりで長く見えたワケだ。なるほど、これなら威力も上がるし反動も小さくなるね。でもコレ、作りが荒いよ。これじゃあ折角のフレーム剛性が台無じじゃない？それに、この銃身材つて軽さを基準に選んだでしょ？　これって熱

に弱いから銃身材には向いてないよ？」

それを聞いて悔しさ半分に少しイジワルを囁く。

「あらあら～。じゃあ今度、エミリアに改良をお願いしようかしら
～？」

「え、あ、いや！ 無理無理！ あたしのは知ったかだし！」

無理！ 絶対無理！ と連呼しながら私にシッガ・デスタを返そ
うとこちらに来るエミリア。と、ここでエミリアを左手で突き飛ば
して半歩下がる。私が居た所とエミリアが居たところの丁度重なる
辺りに、亀のような形の変な外見のスタティリアの一種がこちらに
向けて砲弾のような物を撃つてきた所だった。

私は仕方なく右手を変化させてプリンガーライフルにして構え、
撃ちこむ。しかし射撃に耐性があるらしく、効果は薄そうだ。しか
し、それでも数を撃ち込めば話は別だ。無数の黒いエネルギー弾に
とうとう装甲を貫かれ、蜂の巣になるスタティリア。尻餅を付いて
いるエミリアに駆け寄つて声を掛ける。

「大丈夫だった？」

「う、うん。平気だけど、その銃は？ 今、ナノトランスしないで
出したように見えたけど……？」

「え？ あ、いやあ氣のせいじゃないかしら？ ちゃんとナノトラ
ンスしたわよ～？」

「いや、でもこう、一コツつて……」

「いやいやいやいや、氣のせいや氣のせいや～ も、早く立つて！

行きましょう？」

「それにしても、なんでレリクスなんてあるのかしらねえ？ ねえ
エミリア？」

話が途切れたので苦し紛れに強引にエミリアに話を振る。

「う～ん、それには諸説あるらしいんだよね。ともかく旧文明が存

在してた事は間違い無いとして、何故旧文明人はどうしてレリクスみたいな建造物を作ったのか、なんだけど・・・旧文明人が生きた時代にもSEEDの襲来があつて、身を守る為に建造したっていう説が多分一番代表的なんじやないかな。確かにこの説は信憑性が高いんだけど、でも矛盾点もあるんだよね。まず第一に、既にSEEDは封印されて全滅してるハズなのに、何故こうして新たに起動したレリクスが有るのかって事。次に、対SEEDの為ならどうしてSEEDの襲来と共に一斉に起動しなかつたのか。有る程度の間を置いて、それぞれがそれぞれのトリガーに合わせて順次起動していくとすると、単純に対SEED用とは考え難いんだよね。他にも、色々とあつて・・・あ。

私がポカんとして聞き入つていてる事に気付き。硬直するエミリア。私はそんなエミリアを目を丸くして見つめながら、素直な感想を述べる。

「詳しいのね～。びっくりしたわ～・・・」

エミリアが若干慌てた表情で言つ。

「え！？ あ、いや、常識よ、常識！ 傭兵ならこの位知つて当たり前なの！」

「あらあら、じゃあ私は二ワカなのかしら～？」

「う、うううう・・・・・」

エミリアが不機嫌そうな顔をする。

「も、もう！ ほら、さっさと行こ～！ 早く出口見つけて、早く外に出て、早くあのおっさんに文句言いまくつてやるんだから～！」

「おっさん？ つて、あのロングマートの？」

「あれ、知ってるの？」

「う～ん、詳しく述べは分からないわ～。エミリアが駄々をこねていた相手でしう？ その程度。」

「え、まさかさつきの見てた？」

「ええ、ばっちり。「いやだ～、帰りたいよ～！」 つて駄々をこねている所の一部始終。」

ほぼ完璧な声真似に自画自賛したくなる気持ちを乗せてエミリアにどや顔を見せ付ける。何故か少し落ち込んだ表情をするエミリア。表情豊かでカワイイ子ねえ。

「うう、見られてたんだ……あのおっさん、あたしが働かないからって無理矢理軍事会社なんかに入れて、しかもいきなりこんなレリクスにほつぽつて！　あー、もう！　何かむしょうに腹が立つてきた！　ねえ、こんなか弱い女の子をレリクスに放り出すなんて酷いと思わない？」

「そうね～、確かにちょっと厳しいわね～。」

「そうだよね！　そりゃああたしも仕事を選り好みして全然やらなかつたけど、これは流石に酷いよね！」

「ん～、選り好みするのはともかく、全然働かないのは問題じゃないかしら～？」

「え～？　何、もしかしてあんたもおっさんの味方～？」

「そんな事は無いわよ～？　ただ、ちょっとエミリアに同情の余地が少ない気がしただけ。まあ、ここから脱出して、言いたいだけ文句を言えれば良いんじやないかしら～？」

「ぶ～、なんか誤魔化された氣がする～！　ま、それもそうだよね。よ～し、絶対にこつから脱出するぞー！　おー！　・・・って事で、よろしく！」

「・・・あんまり、人に頼り過ぎるのは良くないと思つわよ～？」

「()」は・・・

大きな通路のようなスペースに出た。両側にはズラリと大きな騎士のような形の物体が。何だか微妙に莊厳な雰囲気で思わず立ち止まってしまう。

「()」、これ全部、人型の大型機動兵器だよ？　タダでさえコツチ見て怖いのに、動き出したらって考えると・・・うう、早く行こう

よ～・・・。」

エミリアが後ろに隠れるようにすがり付いてくる。背後のエミリアを見て、思わず顔が綻んでしまった。

もし、自分にこの位の子供が自分に居たらきっとうんぬを感じんだろうな、なんて考えてしまって。

と、エミリアの側からは反対側、私から見れば前方から大きな駆動音がした。振り向くと、こちらを向いて武器を片手に吼えている。威嚇のつもりだろうか。エミリアが慌てた声で言つ。

「ちょ、ちょっとちよつとー、言つたそばから動き出さないでよー。」

私は左腕でエミリアを制する形を取り、エミリアに言つ。

「少しづつ下がつてなさい。」

「えー!? む、無茶だよ! あんなデツカイの相手に一人なんて!..」

エミリアの方に目を向け、少し強く言つ。

「じゃあ、手伝ってくれるの? いえ、あなたに私を手伝える?」

「う、そ、それは・・・」

「なら下がつって。大丈夫、あの程度ならいくつ出て来ても負けないわよ。」

エミリアが悔しそうに唸り、そして言つ。

「わ、分かったわよ! あんたのその大丈夫って言葉、信じるからね!」

「ええ、信じて待つって。」

そう言つて、田の前まで近付いていた巨体の機械騎士と対峙する。

大斧を横に構える。それを見て高くジャンプする。足元を一撃必殺の破壊が通り過ぎる。私は空中で機械騎士の頭にショットガンの照準を合わせ、抜群の破壊力を持つ銃弾を撃ちこむ。しかし、

「あらあら、硬い子ね〜?」

確かに少しだけ装甲が剥げた。しかし停止にはほど遠い。これは装甲部分に撃ちこんでも大したダメージにはなりそうもない。それならと着地と同時に横つ飛びに斧の大きな縦振りをかわして脇腹辺

りの装甲の無い部分を狙う。ショットガンの銃身をほとんど刺し込むように突きつけて引き金を引く。すると、

「G W A R R R R R ! ! ! ! !

巨体が大きく揺らぐ。なるほど、やはり。硬いのは装甲だけ、むしろ脆い装甲の下を覆い隠して守るための堅固な装甲というわけだ。それからも攻撃をかわしては装甲の隙間に銃弾を撃ちこんでいき、とうとう完全に動きを止めるに至る。

「ふう。ま、意外と楽しめたわね～。」

そんな事を言つていると、後ろからエミリアが驚いた顔でこちらを見ている。

「す、すごい……あんな大きいの、一人でやつつけちゃった……。

「ふふふ、ね？ 大丈夫だったでしょう？」

「う、うん！ ほんと、すごいね！ ちょ、ちょっと信じてみて良かつたかな～って……。」

「あらあら、それは良かつたわ～。」

そう言つて一人でしばし安堵の空氣に浸つていると、そいつ等は突然、全機、ほぼ同時に動き始めた。エミリアに近い機体がエミリアに容赦無く襲い掛かる。

「え・・・？」

そう言つて驚愕の表情のまま固まってしまうエミリア。私は機械騎士が動き始めたのとほとんど同時に地面を蹴つて駆け出していた。そしてエミリアを弾き飛ばすと、ショットガンを盾にして大斧の一撃を受け止めようとする。しかし、もう限界だった。

ショットガンは大斧の一撃を受けた瞬間、ひび割れ、砕け、細かなパーティと壊れたフレームの破片と化した。

そしてある程度は勢いが減殺されていたとは言え、大斧の一撃が左側頭部から頭部の四分の一近くを削いでいった。

粉々の破片になつて粉碎される眼帯のようなヘッドマウントディスプレイ。

しかし、私は倒れない。それ所が、血の一滴すら出ない。削がれ、宙を舞つた左側頭部がべちゃりと汚らしい音を立てて地面に落着し、その場で黒い粒子となつて霧散する。

それは撃破されたSEEDフォームのそれと良く似ていた。

私の中から、今まで私の形として丸め込んでいた物が、黒い液体のように左側頭部から溢れ出す。

それは私の左半身、特に左腕を瞬く間に覆い、影のようにも見える真っ黒いそれは瞬く間に大きくなり、それらを螺旋状に隠すようにして、緑色の点滅する点が規則正しく並ぶ紫色の帯のよつな物が覆い、それは最終的に太く、禍々しい、巨大な蔓とその先端に蕾のような形の膨らみのある触手のような物となつた。

私はそれを大きく振り、真横から機械騎士に叩き付ける。機械騎士は上半身だけがちぎれるようにして壁に叩き付けられ、粉碎し、その場には支えるべき上半身を失つた下半身だけが残つていた。

Hミリアが驚愕と恐怖を顔いつぱいに表現した表情でこちらを見る。私は左腕の触手を大きく振る。Hミリアが体を小さくするが、勿論エミリアを狙つてはいない。

Hミリアを後ろから狙つていたやつを叩き潰したのだ。エミリアが恐る恐ると言つた感じで顔を上げ、そしてこちらを見ると同時に叫ぶ。

「う、後ろお！！！」

その瞬間、後ろを振り返るが間に合わず、胸に深々と大斧が抉りこみ、地面に叩き付けられてから完全に背中に貫通する。その後もう一機が現れ、一機で私をメチャクチャに叩き潰しまくる。末端が幾ら破壊されても平氣とはいえ、そのメチャクチャな斧の中には核に致命傷を与えるような一撃も当然のようにあつたワケで、私の意識が段々と薄れていく。

私が動かなくなつたのを確認したのか、二機の機械騎士はエミリアにゆっくりと歩を進める。私はギリギリで動く首でエミリアの方を見る。

エミリアの後方からはさらにもう一機が近付いている。私は渾身の力を振り絞り、体の大きく開いた傷口から左腕と同様の触手、しかしサイズは少し劣る触手を十本ほど飛び出させて私をメチャクチヤに叩き潰した一機を突き刺し、完全に破壊する。しかしそこで力尽きてしまう。体から飛び出させた触手が黒い粒子となつて霧散する。私は薄れしていく意識の中で必死に口を動かす。しかし動いてるかどうかも分からぬし、そもそも声が出ていない気さえする。目も一応開けているつもりだが、他人から見れば閉じているかもしない。

私の口の動きに気付いたのか、それとも本能かは分からぬが、エミリアが私に走り寄る音が聞こえる。そして何か・・・恐らくはエミリアに搖さぶられる。一揺れ、二揺れと段々と意識が薄くなつていいく。

「どうして・・・どうしてあたしなんか底つて・・・ねえ、ねえ起きて、起きてよー。どうして・・・? どうしてみんなあたしを置いてつちやうの・・・? お願いだから、目を開けてよお・・・あたしを・・・一人にしないでよお!!」

その瞬間、不思議な物を見たような気がした。エミリアの顔に浮かぶ回路のようなオレンジ色の線、エミリアの背後に浮かぶ円のような物。そして・・・

「あなたを・・・死なせはしません!」

・・・・女神?

第一話「死にたいわけじゃない。」（後書き）

はい、ようやくとプロローグ終了です！　長いね！　まあ原作がこうだから仕方ない！　で、ネタばらしをしますと、主人公は元人間の大型SEEEDです。まあ過去のお話とかは次回があれば追々という事で。ではでは。

第一話「だけじゃ生きてられないんだよ。」（前書き）

リトちゃんの口調が乱れますが、仕様です。ええ、仕様ですとも。では第一話、「ぐるりくつとお楽しみくださいな～。

第一話「だけど生きてりゃいけないんだよ。」

「・・・ん・・・」

なんだか妙に眩しい。なんだ、地獄つていうのも案外にも明るい物なんだなあ。そう思いながら目を開ける。

目の前にグラマラスなスタイル抜群のひ・・・キャストが居た。

「アラ、おつきしたネエ。チヨット待つててネ？」

そう言つてキャストの女性が奥の方を向いて誰かを大きな声で呼んでいる。

私はその間、周囲を見渡す。派手さの無い質素な、良くなある作りの、随分と小奇麗な・・・事務所？ か何か。何より地獄の割りに明るいし、天国に私が来れるとは到底思えない。

と、言う事は・・・生きてる？ いや、それは考え辛い。だってあの時、私は核に致命的なダメージを受けたし、そうじや無くとも形状を保存しておけない程までに全身にダメージを受けていた。「中身」丸出しならいくらでも生きていられるけれど、それにしてはキャストの対応が普通過ぎる。

人類種の天敵を目の前にしたら普通はもう少し慌てたりしそうなモノだけど。と、言う事は姿形に関してはちゃんと人間のフリができる？ ソれにしてもミンなオイしソウ・・・

ハツと氣付いて左目を押さえる。眼帯、もといヘッドマウントディスプレイが無い。慌ててタオルをナノトランスさせて取り出し、左目が隠れるように押さえ、簡単な眼帯の代わりにする。

応急処置だが仕方が無い。後でどうにかしてライアさんに連絡を取つてまた作つてもらつとしよう。頭の後ろでしっかりと縛り、ズレない事を確認すると近付いてくる足音に気が付く。

「よう。ようやくお目覚めか？」

「あ、はい～。お陰さまで～。」

そう言つて声を掛けて来た男の方を見る。背の高いビースト。色

のセンスがイマイチなロングコート。ボサボサの髪とヒゲのせいで、顔が鼻と頬ぐらいしか見えていない。

胸元を大きく開けており、そこにはぶ厚い胸板が。少しまさ過ぎる。年も相当行ってそうだし、あまりタイプじゃないかな。オイシソウダケド。

「？ どうした、そんなにジロジロ見て？」

「い、いえ。何でも……あ、それより女の子を知りませんか？」

「あ？ 女の子だあ？」

「こ、う、金髪で、赤い目の……」

「金髪で赤い目？ あ、アイツか。今呼んだ所だ。そろそろ来んだろう。」

と、後ろのドアが開いた音がした。それと同時に何だか落ち込んだような女の子の声が聞こえてきた。

「う、おっさん、今日くらいはかんべんしてよね……。あたしがどんな目にあつたか知ってるでしょ……。」

「知らねーし、興味もねーからかんべんしねーよ。つたぐ、客の前でそんな顔すんじゃねーよ、みつともねえ。」

女の子が不満そうな顔でおっさんと呼んだビーストの男を軽く睨んでからこちらを向く。

「えっと、初めてまして。って、どうかで会つたような……？」

その女の子を見て、私も驚く。

「Hミリア……！ 良かつた、無事だつたのね～？」

「あ、あんた……どうして生きてるの！？ ねえ、何で！？ 何で、おっさん！？」

「あら心外。何だか生きてちやいけないみたいな言い方ね～。」

「人を勝手に殺してんじゃねーよバカ！」

おっさんに罵られても特に意に介する風も無く、

「良かつた、ホンシトに良かつた。アレで死なれてたら一生モノのトラウマだよ。良かつた。そうだよね、あそこで起きた事つて全部夢だつたんだよね、良かつた……。」

何度も「良かつた」を繰り返して安堵するエミコアそれを見て
おっさんが小声で

「よーしょーし、狙い通りエミコアも良い感じに懐いてるな・・・
と言った後、こちらを向いて手を肩に掛けて少し顔を近づけて言
う。お酒臭い。

「お前さん、フリーなんだろ？ 丁度良い、このままウチの会社に
入っちゃまえ。今なら住む場所と居ないよりはマシ程度のパートナー
も付けてやるぜ？ どうせ身寄りもねーんだろ？ ウチは働きの良
い社員にはボーナスもはずむぜ？ どうだ、この辺時世乗らねー手
はねーだろ？」

「へ～、パートナーまで付けるなんておっさんも珍しく太っ腹だね
」。

意外な一面を垣間見て関心したような表情のエミコアに、おっさ
んが肩越しに呆れたような目線を投げ付ける。

「何他人事みたいな顔してんだ。お前の事に決まつてんだろ。」

そう言つと共にこちらに向き直り、口角を少し引き上げて若干黄
ばんだ歯を見せながら私に聞いてくる。

「で、どうする？」

「ちょ、おっさん！ あたしにも選ぶ権利を・・・」

「義務も果たせねーようなバカに権利なんざねーんだよ！ で、ど
うする？」

正直、かなり悩む。確かに一人で動くのはいい加減にキツくなつ
て来た。常に食べ物に困る生活はもう嫌だ。

しかし正真正銘の「おばけ」が果たしてヒートの集団の中で生きら
れるのだろうか？ 正直、正体を明かさずに輪に入つて正体を明か
した時の反動が怖いし、それならばと正体を明かしても、当然の如
くに弾かれるのがオチだ。なら、やつぱり・・・

「ええと、嬉しいんですけど、お断りさせて・・・」

「おおそつか。いや、しかしな。ウチも慈善事業をやつてるワケじ
やねーんだ。」

「へ？」

電卓をポケットから取り出して、何やらポチポチと打ち込み始める。

「ええと？」「今まで運ぶ運搬代金と、メディアカルチェックの費用、そんでききるまでの護衛代金、コイツに人件費と燃料代と手数料を併せると・・・ま、ざつとこんなモンだな。」

電卓を突きつけてくる。と、それを見た時に、やっぱり人類が嫌いになりそうになつた。

「い」五百萬メセタつて・・・

「即金で払えるか？」

「これだから人類は・・・（ブツブツ）」

「ああ？なんか言ったか？で、払えるのかどうなんだ？」

「払えませんよ～！こんなの平均的なサラリーマンの年収から税金を引かなかつた額と同じぐらいじゃないですか～！」

「払えねえだあ？しつかし払つてもらわなければコッちも困るんだよな～？」

「ぐぐぐ・・・」

食い殺してやうつか。本氣でそう思った。しかし今そんな事をしたら今の今まで平和的に過ごして来たのが全て泡と弾けてしまう。殺意をグッと飲み込んで、今取れる最善の選択を取る。

「分かりましたよ・・・」

「よし、決まりだな。既にお前のマイルームは用意してあつから。おい、エミリア。コイツを部屋まで案内してやれ。」

「なんであたしが・・・」

「何か言つたかゴクツブシ？」

「なんでも無いですー！」はあ。じゃ、あたし居住区の入り口の前に居るから。」

そう言つて出て行くエミリア。

「親子仲、悪いんですね～？」

「はあ？ 親子？ 誰と誰がだよ？」

「おっさんとHミリア。」

「おっさんってなあお前・・・そういうや自己紹介して無かつたな。

俺はクラウチ・ミコラー。お前は?」

「リア・ゲートです~。」

「ワタシはチャエルシー！ヨロシクネ～！」

「あ、はい～。よろしくお願ひします～。」

「おうチャエルシー、どうぞ紛れに自己紹介たあ流石に抜け目ねえな。で、書類は?」

「モチロン持つてきたヨ～」

そう言ってチャエルシーが私に書類を差し出す。

「口々と、口々に署名、お願イネ。本人直筆のサインじゃなキヤ無効扱いにされチャウからネ～。」

「はい～。」

そう言って指定された場所にサラサラっと書く。本人直筆、か。既にリア・ゲートって名乗つて良いのか分からないぐらいになっちゃってるけど、それでも本人で良いのかな。

そう思いながらもう一箇所にも名前を書く。

「はい、できました～。」

「ウン、コレでオッケーね。これカラもヨロシクネ?」

「はい、よろしくおねがいします～。さてと、それではこれで～。」

そう言つてその場を後にする。

「ふあ～あ・・・ねむ。あ、やつと来た!」
「あらあら～、待たせちゃつてごめんなさいね～？」
「まつたくもう一ま、良いや。とりあえず部屋まで案内するからついて来て?」
そう言つて歩き出すHミリア。レリクスの時もそうだったけれど、

こうして改めてみると本当に普通の子供にしか見えない。そういうばあの女神は一体何だったのだろうか？

思えばかなりキワドイ服装をしていたようにも思える。とはいえたとあのレリクスでの出来事は夢だったのだろう。そうに違いない。でなければあんなに理想的な死に時がるハズが無い。そんな事を考えていると、エミリアがとある一室のドアを開ける。「ここが、あなたの部屋。で、あたしの駆け込み部屋！」

「あら、今まで嫌なことがあつたらここに駆け込んでたの？」

「ううん、どうせあんた一人でしょ？ 何かあつたら入れさせて貰うから！」

「ええ～・・・」

別に構わないが、それにしても・・・。

「本当に普通のお部屋ね～・・・何があるワケでも無いし・・・むしろ落ち着かないわ～。」

「あ、それならインテリアショップに行けば？ テーブルとか箱とか色々あるよ？ 勿論リフォームチケットもね！」

「ん～・・・私、お金が無いのよね～・・・。」

「え？ もしかして・・・？」

「ええ、一文無し。そもそもあのレリクス調査に参加した目的だって携帯食料が主な理由だったし・・・。」

「あ、あははは・・・フリーの傭兵つてのも大変なんだね・・・。」

「まあ私の場合、身元が戸籍から出生届から根こそぎ無くなってるのもお仕事が取れない原因だったりするんだけどね～。」

「ふ～ん。」

ただ言うと、エミリアが目をショボショボさせながらベッドに腰掛ける。

「あ～、駄目だ。ホントに眠い～・・・。」

そう言つと共に全身から力が抜けて、糸の切れた人形のようになっただに倒れこむエミリア。部屋を軽く見回しながらエミリアの傍に腰を掛ける。

フツと思いついて、右手をプリンガーライフルの変異させる。どうやら体の方に異常は無いようだ。右手を戻すと、エミリアの寝顔を軽く観察する。

「うまじまじと見ると、一応は同性の私も少しだキッとしてしまう程度に可愛い。スヤスヤと寝息を立てて、ほんとウに力わいラシイ。まったくホントウにオイシソウ・・・・・・・・。ハツとなつて頭を振り、自分の頭の中の思考を搔き消す。とりあえず手元にはまだ300メセタほど残っていた筈だ。飲み物でも買って来て落ち着こう。

腰を上げてドアから外に出ようとすると、その時だった。

「待つて。」

後ろから、つい最近聞いた気がする女性の声が聞こえた気がしたのは。

「ここになら・・・一人で話が出来そうだから・・・。」「

さつきまでベッドで寝ていたハズのエミリアが、おぼつかない足取りで部屋の真ん中に立つていて。そしていつか見た、あのオレンジ色のような金色のような回路がエミリアの全身に走る。

そしてエミリアの体から出た金色の光が一箇所に集まり、そこに女の人が現れた。

見惚れるほど美しい人だつた。

流れるような金色の長い髪。

文句の付けようの無い抜群のスタイル。

その均整の取れたスタイルを見せ付けるかのように露出度の高い服装。

そして優しさを秘めた金色の瞳。

何処を取つても私より女性的で美しい女性だつた。

が、何かおかしい。

この人、そこに居ないように見える。

もつとも、物理的にエミリアの体の中にこの身長の人が入つていられるわけが無いのだから、立体映像的な何かと考えるのが道理だ

う。

生体をナノトランスしたと言つのなら、ハンディサイズのトランサーで生き物が生きたままにナノトランスできている事に疑問があるが。

と、その少し変な女性が語り始める。

「私はミカ。訳あってこの子に宿る、意識のみの存在です。この姿も、状態も、すでに失われた古の技術によるもの。失われた技術を旧文明のものと言うのなら、私は「旧文明人」となりますね。」

話がいきなり突拍子も無さ過ぎてどうにも言葉が見付からず、呆然とする。そしてミカが、旧文明に起こうたＳＥＥＤの襲来と、その旧文明が計画し、実行に移した「復活計画」に関して話し始めた。

大まかに話し終えると、ミカがこちらを見据えて、頭を下げる。

「どうか、この忌わしい計画を阻止するために、手を貸していただけないでしょうか？　この子は・・・心を閉ざしきつていて、私の声を認識してくれないのです。」

「でも、あなただって旧文明人でしょう？　なら、何故阻止しようとするんです？」

「確かに私は旧文明人ですが、現代への回帰を望んではいません。私達は滅ぶべくして滅んだ。世界は次の世代に任せるべきなのです。

」
そう言つて一息付いてから、ミカが先ほどまでよりも、より一層深刻な顔をして、語り始める。

「・・・それに、貴方にとっては既に私の存在は他人事ではないのです。・・・何故、縁のないはずの私と貴方が話すことができるのでしょうか・・・？　そしてあのレリクスで自律機動兵器に襲われたのは、本当に夢だったのでしょうか・・・？」

その時点での嫌な予感が胸を過ぎる。と、確信的な一言を、ミカが言い放つ。

「・・・貴方は、生きているのでしょうか？」

私はその一言を聞くと同時に、ミカに掴みかかった。しかし実体は無く、手は空を掴むばかりだった。両手を握り、歯を食いしばり、普段では有り得ないほどに語氣を荒げる。

「何で私を生き返した！？　あのまま死ねばようやくこの太陽系から最後のSEEDフォームが消えたハズなのにッ！！！　あのまま死ねば私はまだリア・ゲートとして死ねたハズなのにッ！！！」

一人の「人間」として死ねたハズなのに！！！！

「ツ！」

「どうして・・・どうして私を死なせてくれなかつたんだツ！！！　SEEDフォームなのはアンタだつてすぐに分かつたハズだ！！！」

！！　私の身体は・・・私の身体はもう、戻れないんだ・・・・・。

」

その場に俯き、へたり込む。歯を食いしばって、拳を握り締めて。夢であつて欲しかった。あのまま死にたかった。あれ以上の死に時なんて、もう一度と無いだろう。

後はもう・・・また精神を侵されて、人を襲う単なるSEEDフォームに逆戻りして、その時の英雄に討たれるしか、もう無いのだろう。

「何で・・・どうして・・・・・」

涙は出ない。もう涙腺が無いから。鼻水も出ない。鼻はあるが、これは「リア・ゲートの顔」を再現する為の形だけのパートであり、装飾品だから。

ミカは言葉が見付からないらしく、ただ、申し訳なさそうに斜め下に視線を落としている。

「・・・ふあ・・・・・」

Hミリアが寝返りをうつのを見て、ミカと私は同時にハツとする。と、同時にミカが少し慌てた様子を見せる。

「 ものの子が田を覚まします。詳しきはまたいづれ・・・」

そう言つて消えるミカ。と、HIIコアが田を覚ましそうになるのと同時に、部屋の真ん中でへたり込んでこるのは流石に変だうと思ひ、慌ててベッドの上に横になつているHIIコアの隣に腰を掛け
る。

「 ・・・ふあ、あつ。んー、ちょっと寝けやつた、かな？ ・・・

ん？ あのせ、なんでこいつ見つめてるの？

「 へ！？ え、ええと・・・あ、寝顔を見てたのよー 可愛いな~
つて思つて~。」

「 ちよつ・・・！ 寝てるのに気付いてたんなら起こしてよー。」

「 ん~、あんまり可愛い寝顔だったから~」

「 あーもひ、恥ずかし・・・」

そう言つて少し目線を外すHIIコア。内心冷や汗ダクダクだったのだが、汗腺も無いお陰でビリビリが誤魔化しきれたようだつた。

第一話「だけじゃ生きてられないんだよ。」（後書き）

へーい、第一話ですだよだぜーーー もう第一話から一ヶ月と半月ぐらいが過ぎてようやつと第一話とかマジ遅すぎますよね。すいません。まあサブ何で、そんなモンです。まあ実際の所を言つと、感想を頂いたのが嬉し過ぎて、執筆ハイブースタが掛かって止まりなくんつちまたのが原因なんですがね。ってな感じでまた次回！

これ、完結まで相当掛かるよなあ・・・。

第三話「それでも私は幸せでいたい。」（前書き）

リアちゃんの知っている情報は大体三年前ぐらいから止まります。でもパルムで生活していたので一部情報は一応知っています。その内昔話とかしつかり書けたら良いなッ！

第二話「それでも私は幸せでいたい。」

次はマイシップに案内すると、ライアを一旦部屋から追い出して、ライアさんに連絡を取る。

何でもライアさんはどこかのエライ人らしいのだが、詳しくは知らない。

知り合つたのは偶然にも病室のベッドが隣り合わせだつた事からだ。バイクで事故を起こしたとかで、立派な体格のやたら威厳のあるビーストやらキャスト、華奢で上品なニューマンやパリッシュした正装のヒューマンなんかが連日見舞いに来ていた。しかも全員やらと低姿勢だつたのが印象的だった。

隣のベッドで精神病患者さながらにロープでベッドに拘束されたいた私に向こうから話し掛けってきた時は驚いたものだ。少ししてすぐ打ち解けたのだが、その頃にはライアさんは先に退院してしまつた。しかし時折お見舞いに来てくれて、しかも無料で特注の「凄い眼帯」を作ってくれた。

ライアさん曰く、「壊れたらまたいつでも新しいのを用意してやるよ!」との事だった。そのお返しに、私はライアさんがお仕事で疲れた時なんかと一緒に街に繰り出して遊んでいる。

何でも立場上、仕事仲間とかは遊び等には誘い難いらしく。とはいえ、亜空間航行の実験やら何やらでライアさんの所もこの所は忙しいらしく、最近は随分とご無沙汰なのだが。

ライアさんに教えてもらつた個人回線の番号に掛ける。そういえば、このビジフォンから掛けるの初めてだな。でもきっと個人回線に掛かってきたら出てくれる人だろう。

『誰だ?』

ほらね。

「あ、ライアさん。お久しぶりです。」

『おおリアー! 久しぶりだねー元気してたかい?』

「はい、お陰さまで～。聞いてくださいライアさん！　私、ついに職に就けたんですよ！」

『おお、やつたじやないか！　じゃ、何かお祝いにプレゼントとか用意しないとな～。』

「あ、それでしたらあの、頼みたい事がありまして～。」

『頼みたいこと？　・・・ああ、眼帯の修理とかかい？』

「いえ、完全に壊れてしまつたので新調してもらいたくて～。お願ひ、できますか～？」

『ああ、分かつた。で、何か追加したい機能とかはあるか？』

『う～んと・・・サーマルスコープと撮影機能、ですかね～。』

『撮影？　なんだ、お前が着いた職業つて情報屋か何かか？』

「いえ、折角腰を据えて仕事が出来るんですし、仕事仲間との思い出とかを写真にしたいなと思いまして～。」

『なるほど、な。分かつた。技術部の連中に伝えとく。』

「あ、あともつと頑丈にしてください。」

『具体的には？』

「ん～と～・・・真正面からの艦砲射撃に耐えられるくらいで～。」

『ハハハッ！　そりやまた面白い注文だ！　分かつた、限界まで頑丈に作るよう言つておくよ。じゃ、いつ頃になるかは後で追つて連絡する。じゃ、またな。』

「ええ、また。お体に気を付けてくださいね、ライアさん。」

『ああ、お前もな、リア。』

通信を終えてビジフォンをシャットダウンする。それから部屋の倉庫の手前の方に仕舞っていたパートナーマシンナーを起動して、基本設定を済ませる。

これで部屋に戻つて来た時にはエミコニアが乱して行つたベッドメイキングも完璧にしておいてくれる事だらう。

もし上手く行つてなくてもその程度のポンコツであると認識しておけばそれ以降は過度な期待をしなくても済む。

起動準備に入っているパートナーマシンナーを置いて、先に行か

せていたエミリアに合流する事にした。

「あ、やっと来た。じゃ、次はマイシップの説明をするからね。」

そう言つてまるでメモを暗唱して来たかのように業務報告と言つた感じで淡々と説明される。その手際の良さは何度も二つ言つた経験をして体で覚えているのではと思わせる程だつた。

転送装置からマイシップ内に入る。その瞬間、私は思い切り目を見開いて驚く。

「モデル9999（フォースナイン）…？ つそ、何でこんな高いのが…？」

そう。この社用として使われている船は各惑星の要人や金持ちが使つているような超高級モデルなのだ。

確かにこれならば三惑星間を休む事無く2400時間飛び続けても壊れる心配も無いだろうし、ワープゲートを使わなくとも別の惑星までほんの数時間で到着できるだろ？

しかしここで疑問が湧く。

「…・何で社用の船はこんなに立派なのに、事務所は普通なのかしら～？」

「あ～…・この船今は社用として使つてるけど、元々はリトルウイングの社長のウルスラさんが個人で所有してた物らしくって。リトルウイングを創設した後になつて社用船が無い事に気付いて、仕方なく個人用の船をいくつか社用にしたんだつてさ。」

「なるほど～…・そのウルスラつて人、相当儲けてるわね～。」

「まあ、ウルスラさんだしね～…。」

そう言つて少しだけ遠い目をしていたエミリアが、一つ可愛らしい咳払いをしてからまた説明を始める。

私はそれを適度に聞き流しながら船内の隅々に目を這い蹲らせた。

非常に綺麗に整備されているのでパツと見では分からないが、これはかなり使い込まれている。モテル9999は金持ちがステータスとして持っている程度の事が多いのでここまで使い込まれている物は非常に珍しい。

そしてメインコックピットを細かく見て行って、驚愕する。

「コイツ・・・改造船だ・・・！」

法定速度を大幅に超える速度まで示せる競技用船のスピードメーター。更に本来なら設置されていないハズのター・ボロケットの稼働率を示すメーターまで追加されている。何より通常とはまるで形状の異なるコンソールがこの船全体の恐るべき改造具合を如実に示していた。

「ちょっとー！ 船ばかり見てないであたしの話を聞けーー！」

耳元で叫ばれて慌ててエミリアの方を向く。

「あ、『めんなさいね～エミリア～。ちょっと夢中になっちゃって～。』

「まったく！ あ、そうだ、会社ではあたしの方が先輩なんだから、敬うようにな！」

「あ、はい～。よろしくお願ひ致します～。」

「うわ、駄目だ。キモチワルイ。やっぱ今まで通りで良いや。」

「あ、あら～？」

そう言つてちょっと困惑していると、エミリアは手近の椅子に座つて全身から力を抜いたようにダラッとする。

「は～あ、それにしても今日は色んなことが一辺に起きて疲れた～。。。初めての仕事でしょ？ いきなりレリクスに閉じ込められちゃうじ、あんたは・・・その・・・」

そう言つて言葉に詰まるエミリア。しかし私を見て少しだけ口角を上げると共に、

「まあ、全部夢よね夢ーつん、白昼夢ー 第一アレで生きてるハズ無いし！ あんたが生きてるって時点で夢確定よね！」

「あらあら～、私はエミリアの夢の中ではどんな死に方をしたのか

しら～？」

そう言いつつ、ヒミコアの座っている椅子の肘掛に腰を下ろす。
「う、それはあんまり・・・でもまあ、その・・・あたしが言った
事を・・・その・・・信じてくれたのは・・・嬉しかった、かな・・・
・。ま、夢だけどさ。」

その俯きながら恥ずかしそうに言いつさまが余りにも可愛らしく、私はヒミリアの頬っぺたを突付きながらもの凄く笑顔になる。
「ヒミリアったら可愛いこと言つちゃって、食べちゃいたくなる
わね～」

「え！？あ、まさかソッチ系の・・・

「言葉の綾よ～ 可愛い」

「むー！ と、ともかく！ あんたのこと色々教えてよ！」

そう言いつと共に跳ね上がるようにして椅子から立ち上がるヒミコア。立ち上がってから半回転してこちらを向くと、人差し指を私の鼻に突きつけて言つ。

「わたし達、パートナーなんだからー。」

「でもヒトに指差すのは止めておきなさいよ～？」

「う・・・は～い。」

私は完璧にSEEEDだった。いや、人として生活はしていても結局、今でも私の身体はSEEEDフォームである事には間違いは無いのだが。

それでも、自己を認識する上で私はヒトであるよりSEEEDであると認識していた時期があった。今ではすっかりヒトを取り戻せているが、それでもやっぱり身体の方はSEEEDのままだ。
それがどうしようも無く悲しく、どうしようもなく虚しい。

結局、私はどちらなのだろう？

私はヒトなのだろうか？

一月も飲まず食わず眠らずで居られるヒトなんて私は電源を落としたキヤストぐらいしか知らない。

私はSEEDなのだろうか？

SEEDウイルスを自発的に散布しないように務めるSEEDフォームなんて聞いた事が無い。かのヘルガ・ノイマンですら他のヒトにSEEDウイルスを植え付けて散布していたのだから。

私はヒトなのだろうか？

身体を変異させ、SEEDフォームを産み出す事で無限に近い戦力をその身から搾り出す事の出来るヒトなんて有り得るハズが無い。私はSEEDなのだろうか？

ヒトを庇つて死ぬ事を望むSEEDフォームなんて有り得るのだろうか？ ヒトを大事に思うだけの心を持つたSEEDフォームなんて有り得るのだろうか？

私はどちらなのだろうか？

心はヒトであると信じたい。

だが身体がSEEDである事は否定のしようが無い。

私はSEEDとして沢山のヒトを殺した。

その何れもが死んでも仕方ないと言われるほどの最底辺とも言える連中だつたとしても、私は本当に沢山のヒトをその手に掛けた。その中には私の両親も含まれている。

両親に関してだけは「子供達」に任せず、自分の手で殺した。頭から硬い金属製の床に向けて叩き付けた。小汚い花を床に咲かせた。私にとつての最高の死に場所は、エミリアを庇つたあの海底レリクスだった。それでも私は生き延びた。いや、生き返らされた。

きっとカミサマと言うヤツが私に天罰を与えたのだろう。ヒトである事を一度諦めて、SEEDと言うバケモノになつた事を言い訳に、実の両親すらも手に掛けた私に。

「理想的な死に方はさせない」と。

「もつと苦しんで生きる」と。

HIIリアはどうやらあのレリクスの一件を夢だと思つていらし
い。

だからそれが、「夢」から「現実」に変わった時、きつと私の正
体を知ると共に私から離れてしまうのだ。

それは凄く悲しいし、凄く辛いし、凄く苦しいが、仕方の無い事
だ。

SEEDEフォームと一緒に晒たら、いつ汚染されるか分かつた物
じや無いんだから。

むしろ穢れの知らないあの子を犯してしまつ前に、自分から離れ
た方が良いのかも知れないとすら思つ。

でも。

でも、もう少しだけ。

もう少しだけ、この暖かい夢を見ていても・・・良いでしょ?

「HIIリア～、そつちは終わつたかしら～？」

「ま、まだ・・・つてうわあ！？」

「HIIリア！…」

HIIリアがヴァーラの一撃を辛うじて避けると、少しみつともな
い体勢でヴァーラの前から逃げる。

追い討ちを掛けようとしているヴァーラの両腕の手首にあたる部
分にフォトンの弾丸を撃ち込む。

痛みで悶えながらもこちらを向いたヴァーラの両手が次の瞬間に
はフォトンの弾丸が突き刺さり節穴になる。

悲鳴を上げるべくして開けられた口に更にフォトンの弾丸を撃ち

込まれ、とうとうヴァーラは絶命する。

「う～ん・・・やつぱり200メセタのレンタルブドウキ・ハドじや精度悪いわね～・・・。」

「そのレンタルブドウキ・ハドにも劣るあたしの戦力・・・やつぱあたしこの仕事向いてないんだよ・・・。」

精度の低い整備も悪いレンタルされたハンドガンのブドウキ・ハドの照準を微調整していると、エミリアが誰が見ても分かるほど落ち込んでいる。

「でもみんな最初はそんな物よ～？ 英雄イーサン・ウェーバーも同盟軍総司令官フルエン・カーツも最初は素人から始まってるんだから～。」

「異議あり！ キャストは最初から基本的な戦闘方法はインストールされてると思います！」

「あらあら～？ でもインストールされてる分だけじゃハウツー本読んだヒューマンや何かと変わらないのよ～？ 現に我が家に乗り込んできたキャスト共だつて～・・・」

そこまで言ってこれ以上はマズイと思い、止める。

「ど、ともかく、最初はみんな素人なのよ～。諦めるのはもう少し頑張つてからにしましょう～？ それに危ない時は助けてあげるから～。ね？」

「う～・・・はあ、分かったよ。もう少し頑張つてみる・・・。」

照準の調整を終えて、先へ進む。

ここは惑星パルムのラフォン草原。

生え茂る草に寝転びたくなるのは恐らく万人に共通する感覚のハズだ。勿論私も寝転びたいが、仕事で来ているのでそもそも言つてられない。

今回の仕事はヴァーラの群れの討伐。何でも最近、この辺の農家が飼育しているコルトバがヴァーラの群れに執拗に狙われているらしい。

大した報酬は貰えない物の、危険はそこまで高くはないのでエミ

リアの実力を見るには丁度良いと思い、この仕事を引き受けた。

エミリアは以前、クノーと言つヒトに戦闘の手解きを受けた事があるらしく、基本はちゃんと出来ていた。基本が出来ていれば本来ならそこまで苦戦する事も無いのだが。

「うげ！？」

エミリアは基礎的な体力がまるで無い。

エミリアの背に飛び付いているポルティの四肢の末端を撃ち抜いて剥がし、数回バウンドしてこちらに転がってきたダルマ状態のポルティの頭部を踏み潰して殺す。

その間にエミリアは正面に居る一匹の内片方を右手のセイバーで切り伏せ、もう片方を数歩下がってハンドガンによる射撃で仕留めていた。

たったそれだけでエミリアは肩で息をしている。戦闘の緊張と言うのも勿論あるのだろうが、それでもこれは致命的な気がする。

「・・・エミリア、帰つたら筋力トレーニングしましちょう？」
「えー！」

無事にヴァーラの群れを殲滅した頃には、エミリアは大の字になつてそこら辺中に血溜まりの出来た草原に寝転がつて居た。
シールドラインのお陰で返り血を浴びてないのでエミリアから出た出血では無いとすぐに分かるが、服が赤いせいでのヒトによつては即座に勘違いを起こすレベルで衝撃的な絵だ。

「もう・・・はあ・・・もうムリ・・・動けない・・・・・・」

そう言つて疲労を全身で表現しているエミリアの傍に行く。

「あらあら～。それじゃ、よつこいしょつと～。」

そう言つてエミリアを抱き上げる。思つていた以上に軽くて驚いたが、何よりいきなりお姫様抱っこされたエミリアはかなり困惑している様子だった。

しかしそれでもすぐに慣れたのか、異性では無いのであまり意識せずに済んだのか、直ぐに平静に戻っていた。

「それにしてもリアつてほんと何者なの？ 精度とか威力にぶつくさ文句言う割にはヴァーラ一体倒すまでにほんの一秒钟ぐらいしか経つてなかつたし。つて言つたが、ハンドガン一丁での数相手にあそこまで立ち回れる？ フツー。」

「ヒミリアだつて沢山修羅場を潜り抜けていけばすぐにこれぐらいは出来るようになるわよ～？ あなたはとつてもスジが良いもの～。同じ失敗は繰り返さないし～、覚えも良いし～。」

「そ、そう？ エ、えへへ・・・なんか恥ずかしいな・・・。」

「でも基礎体力が低すぎるから、ちゃんと鍛えないとけないけどね～。」

「う・・・で、でもその辺もテクニックで・・・！」

「テクニック使つても体力は使うわよ～？」

「むぐぐぐ・・・あ、そう言えばあんたつてテクニック使わないよね？ 何で？」

「理由は無いけれど、強いて言つなら銃が好きって事かしら～？」

「へ～・・・。」

それからも他愛ない話をしながら船の場所まで歩いて行つた。

第三話「それでも私は幸せでいたい。」（後書き）

第一章、ようやくの終了です。

この後は多分、普通に第一章が始まります。

これからも大体一章三話ぐらいに纏めれたら幸せだなあ・・・。
そうすれば大体、三十話目くらいでラストですからね。まあ色々と脇にブレまくるんでしょうけどね！きっと！

追記：ライア総裁はリアの正体や経歴を知った上で親しくしています。その辺もその内書けたらいいな！

第四話（聞）「グラールには従順清純派メイドをタイプより生意氣タメロボタ

マクマホンじゃ無くてオクラホマニキサーじゃ無くて幕間つてな
ヤツです。あの、大体のアニメや漫画で一番内容が無くて笑える、
あの辺りですね。

なるべくギャグっぽく仕上げようと頑張ったんですが、所詮は金
屬製の箱ッ！（キリッ）
ギャグセンスは流石の皆無ッ！（キリッ）
無駄な努力だつたッ！（キロッ）

第四話（聞）「グラールには従順清純派メイドさんタイプより生意気タメ口ボク

「あら、意外と出来る子だつたみたいね～？」

「うう～～～、随分と綺麗になつていてる部屋を警め回すように見回しつつ、キッチリとベッドメイキングの施されたベッドに腰を掛けた。

と、同時にまるで魔法少女から露出度を引いて、聖職者の服装を足し合わせたような緑色の服に身を包み、服と同系色の長い帽子を被つた、私のお尻ぐら～いの背丈のお人形のような少女がトロトロと歩いて来た。

確か型番は『GH440』だつたか。出発前に入力しておいた名前を呼ぶ。

「ただいま、メリ～。ちやんとお仕事できる子みたいでよかつたわ～。

「はい、お帰りなさいご主人。」

「ん～？」

「？　どうかした？」

「いえ、タメ口のパートナー・マシナリーって随分と斬新なセッティングだと思つただけよ～。」

「ああ、それはきっと一ีズつてヤツだね。きっと居るものなんだよ、従順なメイドさんタイプより生意気な妹タイプの方が燃えれる人が。」

「ふ～ん？　あなた随分詳しいのね～？」

「まあ、そう言つ一ีズに応える為に作られたタイプだからね。」

「へ～・・・ちなみに～、燃えるって何に燃えるのかしら～？」

「え、それは・・・。」

頬を赤く染めて目線を外す。その様子があまりに可愛くて、ついにイジワルしたくなってしまった。

「な・に・に・燃・え・る・の・?」

「え、え~と・・・その・・・」

「え~とじや分からないんだけど~?」

「う、ううう・・・・・」

顔どころか耳まで真っ赤になり、もう涙目になってしまい、帽子を引っ張って目元まで隠してしまっている。

流石にこれ以上はかわいそうだと想い、後頭部のあたりにそっと手を添えて撫でるようにしながら、

「うふふ、大丈夫よ~、ちやあんと分かつてるからね~。それに私、機械にそつ言う事を求めるつもりも毛頭無いから安心してね~。」

「あうひ~・・・酷いよお・・・。」

「あらあら、一応同性なのだけど~? あなたつてむしろわっちの方がつて子なのかしら~?」

「ち、違うよ! そ~じや無くて! ····んもう、ご主人のイジワル!」

そう言つてベッドのある場所から離れて、キッチンへと逃げるよう走つて行く。

それを笑つて見送つてからバスルームに行き、シャワーを浴びて寝巻きに着替えて床に着く。

その晩、私の眼帯として巻いているタオルを取りうとした誰かの腕を捕まえる。嫌に細い腕だった。

「誰？」

「あ、あの、ボクだよー。メリーだよー。」

「ああ、メリー。」

そう言つて掴んだ細い腕を放してやる。上半身を起こし、私の隣に座るようにしていれるメリーを見下ろす。後でメリーから聞いた話なのだが、その時の私の目付きはまるで、『お預けをくらつた猛獸のような眼』だつたらしい。

「メリー？」

「は、はい！」

「あなた、少し生意気に設定されてるらしいけれど、世の中には生意氣や悪戯で済む事と済まない事があるって、わかつてゐのかしら？」

「え、ええ、まあ・・・。」

「・・・良い？　『私から絶対に眼帯またはそれに準ずる物を取らない事』。分かった？」

「は、はい！　分かりました！」

「うん、分かれば良いのよー、分かればー。」

そう言つてメリーの頭をポンポンと軽く叩いてから布団を持ち上げて自分の体に乗せ、眠りにつこうとする。その時、ぼそりと一言付け加えておく。

「もし破つたら、起動状態でスクランプにするから。」

「は、はい！ 心得ましたあーー！」

「フツ・・・まだまだね、ヒミリア。」
「むぐぐぐ・・・ちょっとリアー、なんなのよ」の生意氣」の上な
いパートナー「マシナリーはーー！」
「あらあらー。」

今日も今日とて、パルムのラフォン草原。今度は突然変異の原生
生物を捕獲して欲しいとのお達しだった。名前は・・・失念した。
依頼主はイン・・・なんとか社つて大企業だったと思つ。

何でも、色々な研究に使うらしいのだが。しかし、強引に実験台
にされた経験のある私としては若干抵抗のある仕事だつたりする。
とは言え、仕事は仕事。

報酬はかなりしょっぱかったような気がするが、それ位の報酬し

か出ないような危険度の低い依頼の方が、Hミリアの訓練には丁度良いだろ?」

まあ、今回はいつの間にやらシップの中のコンテナに潜んでいたメリーが付いて来てしまっているのだが。

「セイバー系統の武器を持つておきながらダガー系統の武器を扱うようなら至近距離まで近付くなんて・・・ホント、ハウツー本を読んだだけって感じだね。」

「だつてしようがないじゃん! あたし最近まで戦つたことなんてなかつたんだし!」

「ボクだつて最近起動したばかりだよ? そんなボクにも劣るなんて・・・まったく、本当に駄目だなあ。」

「うぐぐぐ・・・もう! リアも何か言つてみー。」

「あらあら~。」

「そこ! 誤魔化さない!!

「ん~つと~・・・。」

正直、メリーの言つている事は吐き気を催す程度には正論だ。故に、真正面から言ひ返すのは難しい。なので、今回は揚げ足を取る方を選ぼう。

「メリー、ちよつと言ひ方が悪いわよ~? あと、貴女も人の事言えない程度には槍を振る間合いが近いんじゃ無いかしら~? 折角の長い得物なのに、そのリーチが生かせてないわよ~?」
「え、うん・・・でも、Hミリアにはこれ位言わないとつて思ったんだけど。」

「いいえ~、Hミリアはアレで結構飲み込みが早いんだから~。そんなに罵詈雑言織り交ぜなくても分かつてくれるわよ~?」

「う~ん・・・分かった、今度から気を付ける。」

「うん、素直でよろしい~」

目線を少しずらし、ミリアへと向ける。少し離れた場所で、エミリアがその場で軽く素振りをしている所だった。

と、その奥で干し草にも似た、褪せた黄緑色の巨体が動いているのが見えた。全身は硬そうな外殻で覆われているらしく、手足が合計で四本しか無い所を除けば昆虫が最も近い分類に見える。

その両腕と頭部は胴体や足に比べると明らかにオーバーサイズであり、両腕の先には大きく、金属光沢のある爪が生えていた。

しかしその爪自体は特別尖っているワケではなく、むしろそれはメリケンサックの様な用途を感じさせる物だった。

「ミリア、ちょっと静かに。」

「へ？」

「奥にあの・・・ア・・・アス・・・えと・・・なんだっけ？」
「アスターク。まったく、何でブリーフィング受けてないボクが分かつて、まともにブリーフィングを受けたハズの『主人』が分かんないんだ？」

「あらあら～。うん、そのアメトーク」

「アスターク。何で面白い回とつまらない回が半々の深夜番組と聞違えるの。」

「そのアカツキ」

「アスターク。金ぴかロボでも忍者の秘密結社でも無いから。」

「そのアレイスター」

「アスターク。どうして二十世紀最大の魔術師の名前が出てきたの？」

「そのモハメッド・アリ」

「アスターク！！！どうすれば伝説のボクサーと間違えるの！？それによアしか合って無い上にその『ア』も中途半端な所だよね！？もうご主人、いい加減にしないとホントに怒るよーーー？」
「そんなに怒鳴るから～。ホラね～？」

そう言つてアゴで斜め上方を指す。と、そこには先ほどまで遠くに居たハズの巨体が、右腕を大きく振りかぶったポーズで上から降つて来る所だった。

エミリアは飛び上がつたタイミングに合わせてしゃがみ込む事で回避し、メリーは慌てて真後ろに跳んで逃げる。

私はどう動いても今からだと間に合わない。

アスカラングレーじゃ無くてなんだっけ？が目の前まで迫る。私は咄嗟に膝を折つてその場に崩れるようにして仰向ける。うに背中から倒れこみ、ポケットから強烈な睡眠薬が入つたアンプルを右手で取り出す。

アサシングリードが私の頭の上数ミリの所に腕を落着させると同時に、そのままティープキスが出来そうなほど顔に近いアジアンカンフージェネレーションのアゴと思しき部位の下の奥の方、平たく言えば首の血管が通つてそうな辺りに右手に握つていたアンプルを手が埋もれるほど深くに差し込み、中身を挿入する。

すると突然、力が抜けたかのようにガクッと頭が前に落ち込み、

「~~~~~!!!!!!」

本当にティープキスするハメになつてしまつた。

「アッサラームアレイクム・・・恐ろしい相手だったわ〜・・・。」

「ま、まあまあ！別にファーストキスとかじゃ無いんでしょ？ホラ、そんなに気を落とさないで！」

「と言うかアスタークだつてば」主人。アラビア語で挨拶してどうするつもりなのさ。それにしても何と言つが、張り合ひの無い仕事だつたね。」

「ああ、それならワケがあるそつよ～。」

「ワケ？」

「ええ、何でも、複数の軍事会社や傭兵に依頼を回したらしくつて、それで、10のグループで一匹ずつ、合計10匹捕まえるつて計算らしいわよ～。」

「なるほど、つまりその10のグループで報酬が等分されて、そのせいで異常にしょっぱい金額しか報酬が貰えなかつたつてわけね。」

「ええ～、そう言つ」と。で、ウチが一番速かつたらしいわよ～。報告入る時に驚かれちゃつたわ～。」

「ふ～ん。ま、ボクとしてはどうでもいい事だけね。」

「あら薄情ね～。」

「う～ん・・・あたしとしてはもつがよ～つとだけ、練習したかつたかなあ・・・。」

「あらあら～？じゃ、やつて行く～？特別メニュー～」

「う、遠慮しとく・・・セ～とつと帰りつ。帰つて運動した分何か食べたいし！」

「ボクも早く家に戻つてお風呂に入りたいな。」

「あら～、じゃ、早上がりをせて貰いましょうか～？」

「「おーー。」

第四話（聞）「グラールには従順清純派メイドをタイプより生意氣タメロボタ

本編と関係があるよ「うな無」よ「うな？そんな第四話で『』じゃこまして
『』じゃこましてですよ！ さてさて、次から第一章に入つて行く形に
なると思いますだよ！ ってなワケで、次回までしばしお待ち
を～！ ではでは～！

あ、ちなみにこのパートナーマシンナーの話は雑炊さんのを読んで
感化された結果です。勝手にパクつてスイマセンでしたあ～！

第五話「この時間が永遠に続ければ良いの。」（前書き）

何でこんなに次話投稿が早かつたのかって？！ それああんた、事前にこの辺りまで書いてあつたからに決まってっしょ！ ってなワケで、本編第一章、始まり始まりでござりますー！

第五話「Jの時間が永遠に続けば良いの。」

まるで揺れの無い快適極まりない船をわざわざ手動航行モードで、しかもわざわざワープゲートを通らないルートで悠々と航行していく。

行き先はクラシド6のリトルウイング社用船用船着場だ。鼻歌交じりに飛ばしてくる私の肩をエミリアが叩く。

「ねえ、ちょっと良い？」

「ん~? 何かしら~?」

「何でわざわざ手動で、しかもワープゲート使わないルートで行つてるの? 経費と時間の無駄じゃない?」

「あらあら~。でもね、エミリア。さつき見た入つてるお仕事の中には急ぎのお仕事は一つも無かったもの~。時間は少し無駄に使うぐらいが丁度良いのよ~?」

「いや、でも結局燃料は無駄使いしてんでしょう? そつまつないのでイチイチおっさんにどうやされるのイヤなんだけど。」

「大丈夫よ~。無駄使いしたのは私だもの、どうされるのはきっと私だけよ~。」

「いや、だからあ・・・あ、通信だ。」

そう言つて少し強引に話を切り上げてエミリアがコックピットフロアの中央にセッティングされている仕事の受付を行つたり会社から通信を受ける「スゴイビジフォン」の方へ行き、掛かつて来た通信を受ける。発信先の名前を見た時、露骨にエミリアの表情が曇る。まるで職員室に呼び出されてイヤイヤながらに入る子供のような顔で回線を開き、通信を始める。

向こうが色々とやかましく言つ続けているのか、エミリアは

「…………はい…………はい…………」

と言つて答えるばかりで、明らかに表情もテンションも沈んで行く。

「ええと、本人は今月のツケは払つたって言つてたんですけど……はい……分かりました、本人にそう伝えます……。」

そう言つて通信を切り、エミリアが海溝を思わせる程に深く重い溜め息を吐く。

「今の誰宛～？」

「おっさん宛。ちなみに今のは家からの転送通信。ついでに相手はおっさんの行きつけの飲み屋。おっさんさあ、あたしには働けって言つけど自分は昼間つからお酒飲んではつかだし、飲み屋はツケで飲んでくるし……バリバリ働いてとは言わないけど、人並みにはちゃんととして欲しいよね。アレでも一応あたしの保護者なんだし。」

「確かにそうね～。ツケ払いは良くないわね～。まあ私も食い逃げの一つや二つや三つする事もあるけどね～。」

「いやいやいや、食い逃げの方がマズイでしょ！？」

「後で払いに行けば良いかな～って思つて～。」

「そんなワケ無いでしようが！？」

「でもツケ払いってそういう事じや無いのかしら～？」

「むむむむ……はあ、ともかくあたしはこの事をさつさとおっさんになふたいから、ちょっとだけ急いでくれない？」

「はいは～い。」

そう適当に答えてター ボロケットに点火して急加速をしたら、エミリアが盛大に転んだ。

そして椅子に寄りかかって眠っていたメリーは、コテツと転んだがそれでも寝続けていた。

どうやら急激な加速や急速に変わる重力方向に耐えられなかつたらしく、エミリアが気分を悪くしたので、クラッシュ6に着いてから十分ほど小休止を取つてからリトルウイニングへと向う。

歩いてる最中もエミリアは何處かおぼつかない足取りであちこちへフラフラこっちへフラフラ、生垣に突っ込んだりもしていた。少し面白いが流石に可愛ううなので、エミリアを支えながら事務所へと入つて行く。

事務所では丁度夏休憩の時間なのが、チョルシードルが電腦エネルギー補給用ゼリー（ライチ味）を吸いながら、テレビに釘付けになつていた。

流れているのは『コースラしく、グテールチャンネル5の新人リポーターの紫色のツインテールが少しリズミカルに画面の中で揺れていた。

着工より二年。先月、ついに完成した亜空間発生装置の完成式典がパルムの同盟軍本部で行われました。式には、亜空間理論を確立した総合科学企業『インヘルト社』の『ナツメ・シユウ』代表取締役をはじめ、開発に加わった軍関係者や多くの企業が参加しました。今回披露されたこの装置により亜空間発生実験が成功すれば、有人での亜空間航行計画へと大きく前進することとなります。現在グランドが抱える資源枯渇問題に光明をもたらすこの研究、絶対に成功してもらいたいのですね。

今日のグーラルチャンネル5ヘッドライン—ユースはここまで！

「ユースキヤスターはハルでした！バイバイ！」

「ユースが終わる。と、画面で流れるスポーツユースの特ダネらしい、ユニバースボール出場選手達をチュエルシーが睨みながら、何故か怒声を上げる。

「ノー！ ユースそれで終わりナノ？ 納得いかないヨー！」

「なんていきなり怒つてるの、チュエルシー？」

「今のユース、スカイクラッド社が出てないネ！！ 亜空間航行の計画に、イッパイ出資してるんだヨ！ ウチの良い宣伝になると思つたのーー！」

「あらあら～。」

しかし多額の出資をしているのは何もスカイクラッド社だけでは無いように思える。何せ、ほぼ確実にお金になる亜空間研究。

誰が一番お金を出したかによつてどの程度の権利を得られるか等が決まつてくるとすると、裸一貫にならうとも亜空間研究に出資したくもなるものだ。

つまり、ある意味ではたつた今このグラールで財政の実権を握っているのはこのイン・・・ええと、インヘルト社であると言つても過言では無いかも知れない。

それを鑑みるに、この出資ダービーで一番が何処なのかを伏せるべく、出資した企業の名前を一切出さないと言つのは、ある意味では正しい判断とも言えるかも知れない。

もつとも、これらは全て单なる想像でしかないのだが。

「スカイクラッド社はウチの本社じゃん。リトルウイニングの宣伝にはならないって。」

「あら、でも風が吹けば桶屋が儲かるのよ～？ 少しでもスカイクラッドの知名度が上がつて、波風立つた方が、リトルウイニング

の利益にも繋がると思うんだけれど～？

「そう言わると何かそんな気もして来るけど・・・そんなことよりチエルシー。おっさん、いる？」

「あ、そういうえば、シャツチョサンが一人に用があるって言つてたね。一コース見ててすっかり忘れてたヨ。」

「ま、いいけど・・・奥におっさん、いるんだよね？」

「シャツチョサンのトコ行くなら、ついでにアレもお願ひネ。チョット、待つててネ。」

そう言つてチエルシーはイスをスイーツと滑らせて移動し、自分のデスクまで戻ると、そこで一枚のメモのような物を取り、またスイーツとこちらへと戻つて来てエミリアにそのメモを渡す。

「ランジエリースポット、リッチベルベット。ダグオラシティ店・・・ねえ、このいかがわしい領収書は、何？」

「経費じゃ落ちないカラ、自腹ダヨッて伝えてネ！」

エミリアの額に縦に筋が立つて行く。どうやら大分トサ力に來たようだ。

「あのエロオヤジ・・・！ ツケの払い忘れのみならず、経費の無駄遣いまでするか！」

「なんだ、クラウチさんもしてるんじゃない、経費の無駄遣い。私は、ふふんと鼻を鳴らして少し胸を張つてエミリアに少し得意げに、

「ほりエミコア～、私の燃料の無駄遣いなんてまだまだ生温い物でしょ～？」

「でも金額だけなら燃料の方が高い気がするけど。最近、値段高等

してゐるからね～、航空燃料つて。無駄に噴かした航空燃料に、更に

無駄に噴かしたターボロケットの燃料代を合わせたら、これの1・

3倍ぐらいになりそうだし。」

「うぐ・・・し、資源枯渇問題、早くどうにかならないかしらね～・

・・。」

まさかのカウンター。」これには流石に面食らつた。と、そんなやり取りを見ていたチャエルシーが、時計を見て少しハツとすると共に、手を叩きつつ私達に声を掛ける。

「ハイ、モウお昼休み終わっちゃうカラネ！ 文句は奥でネ！」

「ちよっとおひでたそ！…………つてうわ、酒臭つ！」

「ホント……まるでお酒を撒いたみたいに強烈ね……。」

到着早々、HIIコアが思い切り顔をしかめる。

「よお、来たか。」

「来たか~、じゃ無いっての！ いつもの飲み屋からまた電話来たんだよ！ いいかげんツケを払つて欲しい、つて！」

それから先ほどチャエルシーに渡された領収書を、クラウチに突き付けるようにして見せる。

「それに、これ！」

「ああん？ こりや資料の経費じゃねえか。どうしてお前がもつてんだ？」

「こんないかがわしいものが経費で落ちるわけがないでしょ！ 常識で考える、常識で！」

「ああ？ バカ、わかってねーな。こいつ根回しも必要なんだよ。

「どういう根回しですか～…………モトウブの有力なローグスが経営してるとかなら分からなくもないですけど～…………」

「お、良く分かつてんじゃねえか。」「ええ～！？」

正直、ほとんど冗談だった。そもそもモトウブのローグスが水商売の店を経営しているとは思っていなかつたし、しかもダグオラシティみたいに大きな街に店を堂々と置いているなんて。

いや、それより確かにこいつ言つちよつと悪い事もしなくちゃいけなこような仕事とは言え、本当にローグスと関係を持つているとは。

やはりビースト、横の繋がりが侮れない。

「まあいい、それよりも仕事の話だ。」

そう言つと、クラウチさんは画面に映る水着の女性を幾つか最小化して、幾つかの写真や資料を大きくして見えるようにする。

「喜べ、お前たちにふさわしい仕事を見付けてきてやつたぞ。」
「いつは緊急かつ、重要な依頼だ。急ぎ、探して欲しいヤツがいる。」

「人の検索……? 何かの重要参考人とか、要人とか?」

て
だ。
—

依頼主おっさんじやん！ そんなの自分で探しに行け！」

「おう、二二二、」
「おう、二二二、」

たから口クな依頼がこねえんだよ！」

それを言わざると、

じや無いですね。

んじゃあエミリアだけに行かせるか？」

それが、おまえの心をうなづかせる

ちよ！？ むしろその反応の方が傷一ぐんだけど！？」

モル

これ以上脱線すると修復不可能だと判断したのか、そう言つて無理やり話を切り替えるクラウチさん。なるほど、この人はこうやってのらりくらりとかわすのか。

「**検索対象者の名は「ワレリー・ゴロフ」。51歳、男性・・・種**

族はビーストだ。フレリーの船は、モトウブのクロウドッグ地方と場所が特定している。シティでもカジノでもなく・・・とてもヤツには用事が無さそうなヘンピな場所だ。

「どうやって船の場所を特定したんですか？」

「フレリーの嫁がアイツの船に発信機を仕込んでるんだと。で、訪ねて行つたら、取立てなら場所教えるからアイツに直にやれって、何故か怒鳴られちまつた。まそんなんワケで、アイツの船の場所が分かるんだ。分かったか？」

「ええ～、一応～。」

「場所まで分かってるんなら、なおさら自分で行けば良いじゃん。。。」

「何か言つたかごくつぶし？」

「なんでもないですーーー。」

そう言つと共にエミリアが踵を返すと、私の袖を引っ張つて、

「こんな酒臭い場所にいたら、飲んでもないのに酔つたりやうー、ヤ、
いこいこー。」

と言つ。まあ確かにもうそろそろこの場を離れたかったのは事実だ。なんせ本当にお酒の匂いがキツイ。エミリアに袖を引っ張られるままにその場を後にする。

船の中でぐっすり眠っていたメリーを部屋まで運び、ベッドの上に置いて部屋を出る。

部屋を出て真っ先に向うのはウェポンショップ。200メセタで借りていたブドウキ・ハドを返却し、新品の『ブドウキ・パム』を購入する。セットでダガータイプの武器を買うと割り引かれるそうなので、少し出費がかさむのが気になつたが、とりあえず購入することにした。

GRM社製のロングラン商品、その名もズバリ『ナイフ』。
テノラの製品は確かに頑丈で、大出力なフォトンジェネレーターを搭載しているので威力も見込めるが、いかんせんバランスが悪い。銃火器も、確かにバランスも大事だが、こと刃物に関しては特に重さのバランスが重要になつて来る。銃火器での戦闘の際、百発百中がやはり最高だが、そう言うワケにも行かない。正直な所、百発七十発が当たれば十分に生き延びる事が可能だ。しかし、刃物を用いた近接戦闘ではそもそも言つてられない。

一太刀読み違えればその時点で胴と首が離れかねないし、一瞬遅かつただけで心臓を貫かれかねない。

まあ私はその程度では死なないのだが、それは横に置いておこう。軽量かつ高い次元でバランスの取れた素晴らしい武器と言えばヨウメイ社だが、それはフォトンジェネレーターの出力を犠牲にした上で成り立っているワケであり、やはり威力の不足が目に付く。そ

れにデザインもあまり好きじゃない。

それらを統合した上で、やはり最高の妥協点としてバランスの取れた良い製品を提供しているのがGRM社だ。まあ、GRMタイム一等と呼ばれる故障の多さが目に付くが。

流石に新品でそれは無いハズなので、今回の仕事分は持つてくれるだろ？

・・・まあ、今回の仕事は実入りの無い仕事なので、次の仕事分も持つてくれないと困るのだが。

船に戻ると、Hミリアがいつも首に掛けているヘッドフォンを珍しく耳に着けて曲に聞き入っていた。

足音を立てないように注意しながら近付き、後ろからギリギリ視界に入らないぐらいの所まで耳を近付ける。僅かに聞こえて来た曲は、

「 . . . I don't want this moment
to ever end . . . Where everything
ng nothing without you . . . I wan
t you to know ! !

「わあ！？」

「あらあら～、驚かせちゃったかしら～？ それにしてもエミリア、『With Me』なんて聞いてるなんて～。人は見かけに寄らない物ね～？」

「良いじやん別に！ それに、いつもはもっと別の曲も聴いてるし！」

「あら～、悪い～なんて言つてないのよ～？」

HIIリアが少し慌てたような手付きでヘッドフォンを頭から下ろして首に掛け、音楽プレイヤーのスイッチを切る。それから座席のシートベルトをキチツと締める。

「さ、どうぞ。行くんでしょ？」

「あらあら～。曲を聴きながらでも良いのよ～？」

「そりゃあたしだって聴いてたいけどさ・・・だってあなたの操縦荒っぽ過ぎるんだもん。曲に集中出来ないって。」

「ん～、でも今回は素直にワープゲートを使おうと思つてるから～、多分大丈夫だと思つわよ～？」

「え、そう？ ジャ、大丈夫かな。」

そう言つてヘッドフォンを耳に被せるエミリア。音楽プレイヤーを取り出し、操作していると、何かを思い付いたように手を止めて、

私の方を向く。

「ねえねえ！ なんだつたらさ、船内スピーカーで流そつか？ あんたも好きでしょ？」

「あら～、それは名案ね～。じゃ、お願ひしようかしら～？」

「うん！ 任せてよ！」

そう言いつと共にヘッドフォンを再び首に掛け直し、席を立つて船内スピーカーに繋がる端末を弄り始める。私はコックピットに座ると、揺れないうちに注意しながら船を発進させる。

ほとんどオートでモトウブ行きのワープゲートの前まで着いた辺りで、船内スピーカーからノリの良い、割と激しい数世代前の曲が流れ始める。

「じゃ、行くわよ～。ちゃんとシートベルト締めておいてね～。」「うん～。」

「へー・・・おっさんはへんぴな場所つて言つてたけど、その割りに観光プラント並に船が多いじゃん。」

「そうね～、自然観察～とかハイキング～とかが静かにブームなんかしらね～。」

「それは無いと思つけど・・・つてかさあ、何であたしらがおっさんの貸したものの取立てなんかいけないワケ？ はあ、経費だけじやなくて以来まで私物化し始めてるよ、あのおっさん。誰かガツンと言つてくれないかな・・・。」

「ガツンと、ね～・・・。私が言いましょうか～？ 正直、上司があれだと働く気力も湧かないし～。」

「言つても良いけど、多分無駄だと思つよ？ あたしも言つた事あるけど、全然話聞いてくれなかつたし。あ、いや、でもあれはあたしだから、かな・・・。」

エミリアが少し暗い顔をして俯き、呟く。

「どうすればあたしの話を聞いてくれるようになるのかなあ・・・。

「ん～、そうね～・・・つん、取り合えず、依頼を遂行しましょ～。」

「えー？ そんな事であるおっさんが態度変えると思つ？」

「少しずつ依頼を遂行して行けばその内、話も聞いてくれるようになると思うわよ～？ でも、焦りは禁物よ～？ 『信頼』と言つ木は育つのが遅い木である』って言葉があるぐらいだもの～。」

「信頼、かあ・・・でもなあ・・・正直、この仕事つて結構キツイし、あんまり向いてないような気がするし・・・だつてホラ、さつきだつてあんたのパートナーマシナリーに・・・」

「おいお前達！ここで何してる！」

その声に驚いて辺りを見渡す。が、中々声の主が見当たらない。確かに少し高めの男性っぽい声だつたハズだ。声からして身長165は超えていそうなのだが、まるで見付からない。

「どつち見てんだよー。こつちだこつちー！」

そう言われて真後ろの下の方を見る。と、そこにはまるで子供のような背丈しか無いビーストの男性が立っていた。肌は黒く、目が青く、髪はオレンジ色で逆立っている。

その目付きや物腰から、これは子供では無く大人の小ビーストだと当たりを付けたが、正直言つて小ビーストなんて初めて見た。

「あ、あらー？ あらあらー、もしかして小ビーストの方ですか？」

「そうだよ、見りやわかんだろ・・・で？お前らここで一体何してるんだ？」

「あたし達、人を探してるんです。」

「人探し？」

「トニオー！こつちは駄目だよ、人つ子一人居ない。そつちは・・・ああ、二人見付けたんだ。」

そう言つてもう一人、こちらもまた非常に背丈の低いビーストの女性が現れた。こちらも歩き方などから察するにほぼ間違い無く大人的小ビーストなのだろう。

「いや、こいつ等は今来たばっかの同業者らしい。」

「あ、そつなんだ。」

「ええと、あなた方はここで何を〜？」

その質問に対し、トニーが呼ばれた男性の方の小ビーストが、「おつといけね」と言つた事を小声で言つて、

「その質問に答える前に、自己紹介をさせてくれ。俺はトニー・リマ。んで、こつちは・・・」

「あたいはリイナ・リマ。あたい達、夫婦で傭兵をやつてるんだ。」

「あ、あたしはエミリア。エミリア・パーシバル。んで、こつちはあたしのパートナーの・・・」

「リア・ゲートです。私達はリトルウイングと言つ軍事会社の社員でして、お仕事で人を探しているんです。あなた方も人探し何かですか？」

「ん、俺達はこの文化保護地区を見回るよつて言われて来てるんだ。」

「文化保護地区？」

エミリアが首を傾げて聞く。と、言つのも無理は無いだろう。なんせ辺り一体は單なる密林にしか見えない。自然保護区ならまだしも、周辺には文化的な物は一切見当たらないのだ。それを文化保護区と呼ばれても、イマイチピンと来ない。

「・・・この、密林が、ですか？」

「・・・・・・お前達、そんな事も知らないでここに来たのか？」

トニーがもの凄く深い溜め息を吐く。本当にお前らは教育を受けてきたのか？とか、お前ら実際何歳だよ？とか、何で説明しなきやなんねえんだ？とか、そう言う心の声が聞こえてくるぐらに深い

溜め息だつた。その溜め息を聞いて、ヒミコアが少し頬を膨らます。

「駆け出しだから仕方ないんですー！ ん~、でも文化保護地区とかある観光地にしては誰もいなって言うのは不思議だね。船はこんなにいつぱいあるのに・・・。」

そのヒミコアの意見を聞いたトニオが、少しニヤリと笑う。

「なるほど、勘は良いみたいだな。」

「さつきあたいたいが出くわした原生生物もやけに凶暴だつたし、多分、奥で何か起こってるんじゃないかな。」

「う~ん、だとすると、奥の方に探している人も居るかも知れませんね~。」

「なんにせよ、奥に進まなければ見回りも人探しもできねえしな。「え、もしかしてそれ、奥に行く流れ？」

「ええ~。まあ、さつきちょこ~っと物足りなかつたんでしよう~？ なら丁度良いんじゃないかしら~？」

「えー・・・取立てなら戦わなくて済むと思ったのにー・・・。」「なら~、一人でお留守番する~？」

「それは寂しいからイヤ！」

「ど、言ひづケで~、私達は奥へ行きますの~。それでは~。「お~お~、ちょっと待てよ~。」

そう言つてトニーが奥へと行こうとした私達を呼び止める。

「どうせ同じ奥に行くんだ、一緒に行かねえか？」

「あ、それもそうですね~。それでは、よろしくお願ひ致します~。」

「うん、よろしくね。それじゃ、取り合えずカーシュ族の村に向つて事で、良いかい？」

「ええ、お任せします。船を置いて何処に行つたのか分からぬ以上、それで問題ないですよ。」

「村？ その村までの道のりとかつて分かるの？」

「うん。カーシュ族は各地を転々とする部族なんだ。だからはぐれた仲間が分かるように、文字で目印を残してゐるんだ。で、その文字をあたいはあらかじめ学んできたから読めて、それを辿れば村まで行けるつてワケさ。」

「へ～・・・どんなのなんだろ。」

Hミリアがカーシュ族の文字に若干の興味を惹かれたところで、一向は歩き出す。目的地は取り合えず、カーシュ族の村だ。

第五話「Iの時間が永遠に続けば良いの。」（後編）

へい、反省します。でもだつてIの話にかなつペッタソ!だつたんだもん! と、言ひ訳で、是非とも聞いてみてください。『SUM41』の『With Me』です。SUM41っぽく無いだとか商業用曲だと色々と意見御座いますが、わっちは好きですよ~、こつさうのむ。てな具合で今回はここまで。ただ、次回は何時になるかちよ~つと分からないので、直ぐに来ると思わずこじ、気長に待つていてくださいまし~。ではでは~。

第六話「私に、あなただけが意味をくれた。」

「へー、これがカーシュ族の文字なんだ！なんだか面白い形してるね！」

どうやら初めて見るカーシュ族の文字が気に入つたようで、一番前に出て解説をしているリイナの後ろから覗き込むようにして文字を見ている。

「ん~、面白い形つて書つのは~・・・ちょっと分からぬわね~。
それで、何で書いてあるんですか~？」

「え~っと・・・ここからの大雑把な方角しか書いてないみたいだ
ね。『日の沈む方角』って書いてあるから、幾分、西の方角だらう
ね。」

「西か。って事は、あっちの方になるな。よし、行くぞ。」

「あ、ちょっと待つて！面白いからもうちょっと見てたいんだけど・
・」

「置いて行くわよ~？」

「ああんもう~！」

本当に置いて行く勢いで少しだけ速く足を動かすと、エミリアが小走りで追いついてきた。追いついて来たエミリアの方に振り向くと、原生生物が遠くからこちらを見ているのが見えた。

「トーオさん、もう武器を出しておいた方が良いかも知れません~。

「ん、そうだな・・・出でからでも遅くは無いだらうが、まあ確かに備えておいた方が良いだらうしな。」

そう答えると共に、トニオがクロータイプの武器を右手に装備する。私も先ほど購入したナイフとブドウキ・パムを手に持ち、何時でも戦える状態にしておく。リイナもダガータイプの武器を装備し、エミリアも釣られるようにしていつも使っている特異な形状の長杖を手に持つ。

「あら～？ 結局、それにしたのね～？」

「いや、セイバー系を諦めた訳じゃないよ？ ただ、既の装備を見ると、コッチの方がバランス良いかな～って。」

「あらあら～。そんな事を考へるなんて、随分と成長したのね～ よしよし～」

そう言つてブドウキ・パムを持つ左手でエミリアの頭をぐりぐりと撫でる。

「い、痛い痛い！ グリップがゴリゴリして痛いって…」

「あらあら～。」

そう言つてパツとエミリアの頭から手を離す。と、同時に前からこちらに切り掛かるトニオからの一撃を、真後ろに反る事で避ける。どうやら、真後ろから大型昆虫のような空を飛ぶ原生生物が突進をして来ていた所だつたらしい。その原生生物の、コックピットのような複眼に、トニオの爪が深く刺し込まれて、中から緑色の液体が勢い良く噴出し、

「～～～！」

私に思い切り掛かる。シールドラインのお陰で液体は直ぐに体から流れ落ちたが、それでも正直、気分の良い物では無かつた。

大分進んだ所にある、少し開けた場所。

先ほどの腹いせに少々派手にやり過ぎてしまったかも知れない。

辺りには大小様々、種類も豊富な肉片の数々が散乱し、緑や赤と言った血液的な体液がそこら中で入り乱れて競うようにして水溜りを作っている。

今足をあてがっているのは、ギリギリで生きているヴァンダの心臓。皮膚や骨格だけをナイフで削ぎ落として、心臓に直に足を当てる状態だ。

どくんどくんと戻り動きが、未だ生命活動を続いていると私に訴

えかけて来ている。その感触が心地良ぐ、このまま止まるまでこうしていようかとも考えたが、トニオとリイナ、それとエミコアが先を急ごうと言うので、仕方なく心臓を踏み潰した。

その感触は水風船を踏み潰した感触よりも生魚の塊を踏み付けた感触に似ていて、チチッといつよりもグジヨツとした感触が靴越しに足の裏に伝わってきた。

「お前、割とエグイ殺し方するよな。」

そうトニオに言われて、歩みを進めながらも自分の行いを振り返つてみる。

例えば、あの巨大な羽虫。アレは先に羽の付け根と体液を発射してくる銃口をハンドガンで撃ち抜いて地面に落としてからナイフで恐らく急所であろう場所を上から押し切る。

例えば、あの巨大な花。アレは口からテクニック（？）を撃ち出してくるので、その照準がズレるように弾丸を花弁の付け根辺りに刺し込んでいる。その内、勝手に耐えられなくなつて、勝手に自爆する。

「そうですか？」実戦で威力の低い武器を扱つて戦つなら、こう言った相手の動きを抑制する攻撃の方が効果的だとおもうんですけれど？」

「ああ、確かにそうだ。でもよ、せっきの心臓を直に踏み潰すのは実戦的とは言えねえんじゃねえか？」

「あれは・・・確かにそうでしたね。」

確かに、アレだけは少々やりすぎた感があった。とはいえ、フラストレーションがあの心臓の動きに合わせてとろけていく、あの感覚。あれはきっと誰だつて病みつきになる筈だ。

あの何とも言えない、相手の命を完全に手の内に納めた感触。トニ

オにもリイナにも是非ともやつてみて貰いたい。エミリアには少し早いかも知れないが。

そんな事を考えていたら、どうやら少々下品な顔になつていたらしく、エミリアに不安そうな目で見られる。

「リア・・・あんたわつきからニヤニヤしてるけど、大丈夫?」「え、ええ大丈夫よエミリア〜。・・・あ、アレってカーシュ族の目印じやないかしら〜?」

そう言って話題を反らす。先ほどから幾つか見てきたので、何となく『ソレっぽい』物の見分けが付くようになつっていた。

四人でその目印っぽい物に近付いて行く。それはどうやら新しい物のようで、先ほどの風化しがけの文字列とは明らかに違つて見えた。何より、先ほどまでの物よりも明らかに長い。意味不明の言語だつたとしても、それが長い文章なのか短い短文なのかぐらいは見分けるように、その程度は分かつた。

無論、読めるハズは無いのだが。

リイナがまず解読を始めるが、それまでよりも難しい文法を用いているらしく、口の中で「ん」と「・」や「ええと」と「・」と言つて中々解読が進まないらしかった。

「あ、なるほど。これが最後の目印みたいだね。」

「え?」

「ん?」

「あら~?」

「ふむふむ、なるほど・・・良かつた、そんなに遠くは無いみたい。」

「

リイナより先に、エミリアが解読してしまった。トーオとリイナと揃つて口をポカンと開けてエミリアを見詰める。と、まず先陣を

切つてエミリアに疑問をぶつけたのはトニオだった。

「お前・・・読めるのか？」

「え、だつてさつきからリイナの後ろから見てたし。」

「だとしても、随分と理解するのが早いのね～？」

「いや、分かるでしょ普通？ だつて文法自体はそこまで難しくないし、類似の文字は大体同じ意味が多いし・・・」

「ええと・・・少なくとも、あたいが読めるようになるまでは一ヶ月くらいは勉強したんだけど？」

「え・・・ええと・・・」

大人三人（内二人は小さいが）に詰め寄られてしどろもどろし始めるエミリア。余りにも反応が可愛いので更にプレッシャーを掛けようかとも思つたが、エミリアが話題を終了させるべく手を振りながらそっぽを向く。

「と、ともかく一道はもう分かるんだし、早く行こうよ！」

そう言つて歩き出すエミリア。と、その時だつた。

「お前、止まれ！」

そう声が聞こえると共に、森の奥、エミリアがまさに今足を向けた方向からフォトン製の矢がエミリアの方へと飛来する。私はエミリアの重心が乗つている左足の踵辺りを、低出力なスタンモードに切り替えたハンドガンで撃ち抜き、遠距離から強引な足払いをしてエミリアの体勢を崩す。

矢は真後ろに反るよじにして倒れこんだエミリアのギリギリ真上を通過し、私の方にまで飛んで来る。それを右手のナイフで受けて威力を減殺する。

私がエミリアを倒して矢を受けるまでの一連の動作の内にトニオは右手にクローアを持ち、矢を放った人に迫る。リイナも両手にツインハンドガンを持ち、トニオの斜め後ろに付く。

そしてトニオが飛び掛り、クローアで切り付けようとしたその時だつた。矢を放つた人・・・派手な民族衣装を身に纏つた、端整な顔立ちの少年が真上に手をかざす。それと共に後方から赤い何かが魔方陣のような物と共に召喚され、その赤い物が放つた炎の塊がトニオに迫る。

トニオは空中にあり、その一撃を避ける事は不可能だつた。しかし、斜め後方に付いていたリイナがトニオに真横から飛び付き、炎の塊はトニオに当たる事無く通り過ぎて行つた。

そしてその炎の塊はそのまま放射状に飛び、私の立つている場所に落ちてきた。それを寸前で察して、飛び込むような動きで避ける。顔を上げて、トニオとリイナ、それと民族衣装の少年が居る方を向く。民族衣装の少年はそれまで持つていた弓を槍に持ち替え、高台から飛び降りてトニオとリイナの目の前に降り立つた、丁度そのぐらいたイミングだつた。民族衣装の少年が言ひ。

「おまえ達、絶対にこは通さないぞー、村はぼくが守るんだ！」

それから少しだけ驚いた表情をしてから、それまで以上の憎しみや恨みを込めた眼差しと共に槍の穂先を私に向ける。

「とくにおまえ！ おまえは絶対に通さないぞー、空からきた悪意！」

「あらー？ 初対面で随分と嫌われちゃつたわねー？」

少々気になる事を言つていた気もするが、それを無視して少しあどけてみせる。トニオとリイナは民族衣装の少年が高台から飛び降りてくるまでの間に、距離を取つていた。

私は右手のナイフの出力をスタンモードに変更すると、全速力で民族衣装の少年との間合いを詰める。相手の少年も、槍の届く間合いで近付くべくこちらに突進してくる所だった。

相手の得物は槍。確かにリーチの長い得物だが、逆に近い相手に対しても少々取り回しが悪く、間合いに入ってしまえばナイフでも十二分に勝機があつた。

私が間合いに入ろうとすると、それを阻止すべく、そして致命の一撃を入れるべくして槍による突きが繰り出される。それを右手のナイフでいなして槍の手元の更にその奥まで間合いを詰める。

そして少年の左肩に私の右肩を押し当てる程に密着すると、左手に握っていたハンドガンを少年のコメカミに押し当て、躊躇無く引き金を引く。

出力は勿論、スタンモードに切り替えてあつた。

しかし、頑丈さが売りで、作りが大雑把で、しかも大出力なテノラの製品だ。

しかも完全なゼロ距離。

安物と言えども、コメカミに密着させた銃口から放たれたフォトンの銃弾は、少年の脳を大きく揺らしてお釣りが来る威力を容易く叩き出した。

「うわ・・・」
「あちや〜・・・」
「おいおい・・・」
「あらあら〜・・・」

少年のコメカミから血が流れる。その量は中々の物で、これはひ

よつとするとひょつとするかも知れないと思わせるには十分な量だつた。

リイナから、少年の止血がてらに説明を受けて、少々の衝撃と共に、強い後悔の念を抱いた。

この、うつかり手荒くのめしてしまった少年は、カーシュ族である可能性が高い事。カーシュ族は種族ではなく部族であると言う事。カーシュ族の戦士は確かに好戦的だが、本来は心優しく、警告や交渉も無しに戦闘を仕掛けてくる事は、通常では有り得ないと言つ事。私が与えた外傷が一番大きい物の、それ以外でも既に戦闘を行つた直後のような傷跡が体中に見受けられたこと。

「え、と言つ事は～～～」

「うん。カーシュ族の村で何か起じつたのは、ほほ確實だと思つ。

「

つまり、気を失わせずに動きだけを止めて話を聞ければ、色々と分かつたかも知れないと言つのだ。この大雑把な作りのハンドガンが非常に恨めしかつた。

トニオが頭の後ろを搔きながら、少し面倒くさいことに言つ。

「あ～～～仕方ねえ、一一手に分かれるか。俺らは船まで「トイツを治療しに戻る。お前とHミリアで先に行つて、村の様子を見て来い。

「ええ！？　いや、それだつたらあたしらが戻つた方が良いんじゃ。
・・？」

「別にそれでも構わないけど、あんた達の船に医療ポッドつてあるかい？」

「う～～無い、と思う～～～う～、どうしてこんな危なそうな事を・・・そりやあ、カーシュ族の村の事は気になるけど・・・。
「なら、私だけで行きましょうか～？」

「道は、分かるのかい？」

「あら～～～～～～。」「

Hミリアの方を見る。明らかに嫌そうな顔をしているが、それでも道案内が出来る人が絶対に必要だつた。

「お願い、出来るかしら～？」

「う～～～分かつたわよう～～～。その代わり、ちゃんと守つて
よね！」

「ええ～、任せで～」

トーホとリイナが少しホッとしたような顔をしてから、止血を終えた少年を抱き上げる。

「それじゃ、俺達もなるべく早く後を追い掛けるからよ。」

「あんまり、無理しないようにね？」

「ええ~、もうしくお願ひしますね~？」

「おう、じゃ、後でな！」

そう言ってトーホとリイナが来た道を戻り始める。それを少しの間眺めていたヒミコアが、こちらに向き直ると、少しだけ早い歩調で歩き始める。

「じゃ、あたし達もいこつか？ なんだかんだ言つても、やっぱりカーシュ族の村の事が気になるし！」

「ええ~、行きましょうか~。」

途中、バグデッカと言つ顔面が分厚い装甲で覆われた大型の原生生物との戦闘があつたが、どうにか切り抜ける事が出来た。

武器の威力が足りない為に、装甲の届かない脇腹の辺りに、こちらに向つて飛んで来たサンド・ラッピーを掴んで突き刺して致命的なダメージを与えると言つ、何とも間抜けな倒し方をしたのも、終わってしまえば良い思い出だ。

エミリアが言つにはもう直ぐそこらしい。なるほど、確かに火の匂いがして來た。火は言い換えればそこに人が住んでいる象徴とも言える。

しかし、その匂いにもつと別の匂いが混じつてくる。植物が焼ける匂いと、動物が焼ける、微妙な匂い。木材が焼け、鉄やガラスが溶け出す少し不快な匂い。それらと合わさって、憎しみや復讐心と言つた惡意的感情の匂いが鼻腔をくすぐる。久しく嗅がなかつた匂いだが、何と香しい事か。しかしその他の匂いが余りにも不快過ぎる為にそれらの僅かな芳香も台無しとなつてしまつてている。もつとも、これらの匂い全てひつくるめて、エミリアから言わせれば、

「何これ・・・何か焦げ臭い・・・。」

らしいのだが。しかし、確かに普通に考えればひたすらに焦げ臭く感じるだろう。小走りで密林を抜けると、そこは異様に強い熱気とオレンジ色の光に包まれていた。

「まあ・・・」

「何よこれ・・・」

エミリアと共に言葉を失う。

村が、燃えている。

その燃え方からして、恐らく火が放たれたのはつい先ほどの事なのだろうというのは容易に想像が付いた。何より私が驚いたのは、その火では無く、その火の中から人の匂いを幾つも感じた事だった。その内の半は倒れていると思われる低い位置から感じ取れ、その他立つていそうな人数は、大雑把に数えた感じだと十人前後と言つた感じだつた。

「一体誰がこんな・・・」

「待つて、エミリア。誰か出てくるわ。」

そう言つてエミリアを手で制す。

すると建物の間から、その原始的な建築物に対しても不釣合いな格好の集団が現れた。その集団は皆バラバラの格好をしており、何よりもシティで見る類いのファッショング多く、原始的な建築物とはある意味で対極的な印象を与えた。そしてその一番前を歩く、赤いノートのような物を持つリーダーらしき人物が更に異彩を放つて見えた。

耳の形などからヒューマンらしい事は分かるのだが、異常に肌が白く、髪も完全に真っ白、眼も赤いので恐らくはアルビノなのだろう。しかし何より問題なのは、その服のセンスだった。

真っ黒のロングコートを着ている、のは構わない。だがその胸を肌蹴させるスタイルは如何な物か。確かに私もヘソ出しなので人の事は言えない氣もするが、あんな貧相な胸板を露出させた所で一体誰が得をすると言つんだろうか。もっと分厚い胸板を手に入れるか、

しつかりとした胸毛を生え揃わせてから出直して貰いたい。もつとも、あの真っ白い肌にたくましい胸毛が生えていたら、いつそ色々と通り越して吐き気を催しそうな物だが。

と、そこまで感想を抱いてから、エミリアが声を上げる。

「まさか、この火事つてあいつらが・・・？」

「ええ、恐らくその可能性が高いでしょうね。見た感じだと、あの黒服の男がリーダーのようだけど・・・？」

そこまで言って、もう一つ違和感に気が付く。リーダーらしい男は悪い笑みを浮かべているが、その後ろの人達は皆揃つて上の空で、焦点の合わない目をしている。

「ん～・・・？・・・洗脳、かしら・・・？」

洗脳に関しては色々な物を見て来たので、それなりには詳しいつもりだ。例えば、ビーストだと、洗脳する時にはそのビーストが保護意識を持つ対象を任意で再設定してしまえば良いだとか、ニューマンは自意識が強いせいで意識を保った状態での洗脳が難しく、意識を殺さなければならないから面倒だとか、ヒューマンは記憶を少し弄るだけで意外と思いのままに動かせるようになるだとか、キヤストは論外だとか、そう言った話だ。あの様子だと、意識を殺して身体だけにした上で、その身体を任意で動かしているように見える。実はこの意識を殺すと言うのが意外と厄介で、そこそこの設備が必要なハズなのだが・・・。

「洗脳？・・・ってかそれよりあの黒服の斜め後ろ！あれってワレリー・」「フジちゃん！」

そう言われて黒服の斜め後ろ辺りの人物を見る。そこには確かに、

先ほど見た中年を過ぎたぐらいのビーストの男性の写真と、ほぼ同じ顔の男性が立っていた。

ほぼ、と言つのは、今の表情が余りにもマヌケ過ぎて、同一人物かどうかの判断に少し迷つてしまつたからだ。それほどまでに、酷い顔をしている。

「確かに・・・かなり間抜けな顔をしているけど、ワレリーで間違
いは無さそうね。」

「間抜けって・・・」

「ん？ 貴様達、ここで何をして居る？」

と、ここで先ほどまで赤いノートのような物を手に持つてニヤ付いていた黒服の男がこちらに気付いた。隠れるつもり半分に、木の陰から見ていたのだが、バレてしまったのでは仕方が無いと、木の陰から出て男と対峙する。

「そちがいる、ここで何をしていらしたんですか？ 見た感じで
すと、放火を行つたように見えますけど～？」

「それならば、どうだと言つのだ？ 消え行く存ざ・・・キ、キサ
マは・・・ッ！？」

途中まで言つて、発言を止める。そして、忌々しい事この上ない事を示す程に酷く顔を歪ませる。中々に整つた顔立ちをして居ると言つのに、まったく台無しだ。

「キサマ・・・悪意か・・・まさか封印を逃れた悪意が居ると
はな・・・まあいい、余興には丁度良いだろう。」

「私は貴方の言つて居る言葉の意味が全く分からぬのですが～？
あと、質問に答えてください～。」

「ふん、誰が悪意の質問などに答えようか・・・キサマのその化け

の皮、剥いでから消し去つてやる!」

そう言つと共に、黒服の男がエミリアの目の前まで、それこそ本当に、比喩表現抜きで『あつという間』に移動する。

私は咄嗟にエミリアを右肩で押して動かし、左手のハンドガンを目の前の黒服の男へと向け、躊躇無く発砲する。男はその弾丸を、発射を見てから避け、素手だった両手に刀のようなセイバー系統と思われる剣を一振りナノランスさせて、切り付けて来る。

その攻撃を右手のナイフでいなし、受け、時に避けながら、左手のハンドガンを攻撃の僅かな間隙に撃ち込んで行く。しかし、それらの完璧な隙を突いて放たれたハズの弾丸のその近くが避けられ、防がれる。

右腕一本で両手から繰り出される攻撃を受けて行く内に段々と押され始め、最終的に、相手の両手から繰り出される全力の一撃を、ナイフで真正面から受け止める、と言つ失態を犯してしまつ。

それは例えるならば、超大型のハリケーンに対する木造建築のようだ、大津波に対する小船のような、火碎流に対する自動車のような、そんな暴挙。

当然の如くにナイフは、刃の部分はあるか、フォトンリアクターに至るまでの全ての部品が粉々に碎け散つてしまつ。そしてフォトンリアクターが破壊された事により小規模な爆発が起き、私に小さな隙が生まれてしまう。その隙を見逃すワケも無く、既に振り切つたが為に引き戻せない両腕に代わつて、足を用いて私の身体を大きく薙ぐ。

腹部を狙つた回し蹴り、と言つた方が分かりやすいだろうか。

その蹴りにより跳ね飛ばされた私は、近くの巨木にノーバウンドで衝突する。そして黒服の男は背後に多数の武器を召喚すると、その内の刃物を片端から私に投げ付けてくる。

最初は両腕、次に両脚、腹部、胸も貫かれ、最後の一本は私の眉間に射抜いた。その数実に十八本。

更に男は手を休めること無く背後の武器の中から拳銃を二丁手に持つと、私目掛けて大量の弾丸をばら撒き始める。その連射速度は、正に暴風雨のようだつた。

十、百、五百発近く撃つたかも知れない。その光景を見て、堪えかねたエミリアが黒服の男に飛びつき、腕を掴んで射撃を止めるが直ぐに跳ね飛ばされ、銃口を眉間に突き付けられる。

「まずはお前から消してやるうか？」
「い、いや・・・いやー・・・！」

その声と共にエミリアから眩い光が溢れ出す。その光に気圧されたのか、男がエミリアから数歩下がる。

「この力・・・まさかあなたは・・・・？」
「何・・・・！」

と、同時に大木に縫い付けられて蜂の巣にされていた方にも、変化が起ころる。

「ワたシの・・・エミリアに・・・・・手ヲ・・・・出スなア
！！！」

そう叫ぶと共に、何時の間にやらＳＥＥＤフォームと化した大木から伸びる毒々しい模様の触手が、リアの身体を戒める全ての剣を一斉に引き抜くと、それらを一斉に黒服の男の方向へ、かなり適当に投擲する。さらにリアが、左腕を極太の触手のように変えて、その太い鞭のような触手を、真上から男に叩き付けるように振る。

男は飛んできた剣を無意味な程アクロバティックな避け方で避けると、真上からの極太の鞭をギリギリの所で後ろに飛んで避ける。そのまま忌々しい事を如実に表すような舌打ちを残して、通常では

有り得ない程大きく跳躍すると共に、その姿を晦ませる。

と、同時に姿を晦ました男の事など何処吹く風か、男が姿を晦ませると共にその場に倒れこんでしまったエミコアに、そのままの姿で駆け寄る。

「エミコアー！」

それと同時に、トーオとリイナが到着する。

「おー、これは一体……ってかお前何だその姿！？ それじゃお前、まるで……！」

「ア、え？ と、これは……あ、そんナ事エミコアー！」

そう言っている間に、私が助け起こしたエミコアの容態を、リイナがチェックする。

「……うん、氣を失っているけど、命に別状は無さそうだね。」

「あ、良かつタ……。」

心の底から安堵する。と、後方から、トーオの声が聞こえて来る。

「あ、おーコラー！ 待ちやがれ！」

その声に釣られるようにして後ろを振り返ると、真上を多数の船がリモートで飛来し、その場に居た間抜け面をしていた人達全員がそれらの船に乗り込んで逃げ出している所だった。

「何だつてんだあいつら、突然ハツとしたかと思つたら一田散に逃げ出しやがった。こんなに文化保護地区を荒らしやがつて…… 人残らず捕まえてやる！」

「でも、今の人達、様子が変だったよ？ ハツとするまでは上の空みたいだつたし……まるで、洗脳でもされてるみたいだつた。」

「Hえ、それに関してはワつたしも……」

と、その時だつた。Hミリアの通信機が鳴り出すと共に、クラウチさんの声と映像が出てくる。

「おい！ ワレリーの船が動いたぞ！ オメえらキッチリ追い立てる！ どうなつてんだ！ オイ！ Hミリア！」

・・・これは映像も同時に届ける類いの通信機だつたか。慌てて通信機に対して、自分の右半分だけが映るように身体の位置を調整する。こうしなければ、今の私をモロに見られる事になつてしまいかねない。と、そんな小細工をしてる間に、リイナが通信機に顔を近づけて、大声を出して来たクラウチさんに対抗するような怒声を張り上げる。

「うるさいよ！ 通信回線なんだからわめかなくとも聞こえてるって！…」

「ああ？ 誰だおめえ？」

「たまたま一緒に行動してたフリーの傭兵だよ。Hミリアは今、怪我をして気を失つてるから、大きな声出さないで。」

そのリイナの言葉を聞いたクラウチさんの顔が、毛むくじやらなせいで分かり辛いが確かに歪む。その顔は、悔しそうであり、心配そうでもあった。

「怪我しただと？ ……あのバカ！ 分かった、ワレリーはひつちで追うから、テメエらはとつとと戻つて来い！」

「ア、はい。了解デす～。」

それを最後に、通信が切れる。私は依然として音を立てて燃え盛る村の方へと向き直る。その先からは、微かだが、生きた人間の匂いがした。

「・・・仕方無い、でスよね。」

そう言つと共にリアは、自分の両手の指を噛み千切る。その噛み千切つた指は、地面に落ちると共にムクムクと膨らみ、形を変え、パノンへと変化した。

更に指の傷口から湧き出る黒い液体を、手近の木に塗り付けていく。すると、黒い液体が付着した場所を中心に木々を変質させ、変化させて大型のSEEDフォームへと、その姿を変える。

「・・・サあ、行クわヨ。」

そう言つと共に、SEEDフォーム達が一斉に動き始める。パノンは燃え盛る建物の中へと戸惑う事無く飛び込んで行き、中から逃げ遅れた人々を引きずり出して行く。

木々が変化した大型SEEDフォームは森に燃え広がらないようには、パノンが中に誰も居ない事を確認した建物から順番に潰して行く。その統率の取れた動きはさながら一個の軍隊か、それとも巨大な一つの生物のようだった。

そのあまりの手際の良さに、それを傍で見ていたトニオは戦慄する。

もし、こんな風に完璧な統率の元、SEEDフォームの軍勢が押し寄せて来たら?

確かにイルミナスは兵器のようにSEEDを使っていたが、SEEDフォーム自体に統率された動きは特に無く、本能の赴くままに

動くSEEDフォームは各個撃破の的だつた。

もしSEEDフォームに、統率された動きが出来るだけの理性があつたなら、或いはグラールは本当に終わっていたかも知れない。

リアは今、建物の解体作業と救助作業の指揮に追われているらしく、こちらの動きには気付かない。今ならこのグラールの最後で最大の危機を葬り去る事が出来るかも知れない。

そう考えたが、身体が動かない。

さつきまで一緒に戦ってきた、一時的には言え仲間を殺すような真似が、果たして義理に厚いビーストの、その中でも特に義理人情に厚いトニオに、そんな事が出来るのだろうか？

無論、答えはNOだ。

本当の事を言えば、リア・ゲート本人だって分かつてゐる。このリア・ゲートと名乗る化物は、確實にその息の根を止めなければならぬ。このグラー・太陽系の未来を考えるならば、絶対に『居てはならない存在』である事など、むしろ本人が一番良く理解している。しかし、死にたいとは何故だか思えない。

死ぬのであれば、人として死にたい。そう考えれば考える程に、自殺をしたいとは思えなかつた。何故なら、自殺をするとは、それはつまり自分が人では無いと完全に認めてしまう事と同義だつたらだ。

それだけは絶対に嫌だつた。

私は人だ。

それは以前、一度放棄してしまつた思いだつた。

もう一度掴んだのだ。もう一度と手放したくは無い。

その思いとは裏腹に、身体を変化させ、十数ものSEEDフォームを自在に操るその時間に比例して、リア・ゲートの中の『人』は、急激に死んでいった。

第六話「私に、あなただけが意味をくれた。」（後書き）

ども！「メントのお陰でハンドレッド執筆パワーが発動しますかの十月中投下を可能にしてしまった金属製の箱、ジュラルミンダンボールです！　今回のサブタイトルも、『With me』を超訳した物になります。ちなみに、次回のサブタイトルは既に決まつてたり？しかも実は本編に出てたりなんだり？分かつた人はコツソリメッセージかコメントでわざちに答えを送り付けるか、又は一人コツソリほくそ笑むと良いかもデス！

さてさて、次回はついに致命的なお話になっちゃいやがりますね！今からどう言つ感じで書こうかって頭がビリビリ言っちゃがつてますですよ…

今度こそ本当に遅くなると思いますので、気長に待て次回一では！

第七話「あなたにだけは、知つていて欲しい。」

『『N.O.-080』改め『イザナミ』に関する研究経過報告書（？）』

N.O.-080は、SEEDウイルスを直接体内に投与されたヒューマンとしては初めて、『理性を保ったまま』でのSEEDフォーム化を為した、最初の例である。この個体の特異な変化に対し、以降ニュー・デイズの星産み神話に出る女神『イザナミ』の個体名を付ける事とする。

（中略）

今は当該個体の体质や体調などのデータを応用し、理性を保ったままSEEDフォームへと変える方法を研究しているが、それももう間もなく実践段階へと昇華する事だろう。

当該個体に関する研究資料足り得るデータは既に粗方採取済みであり、これ以上の巨大化や形態変化が進行する前に、早急に処分することを進言する。

イザナミの新たな可能性が発見された事に関して、ここに報告する。当該個体は理性を保つたままSEEDフォーム化を為した最初の例であり、

既にデータは取り終えている物と見なしていた。しかし近日、当該個体はSEEDフォームをその身から生成する能力がある事が判明した。

(中略)

これは画期的な発見であり、当該個体の処分は先延ばしにする事をここに進言する。

『『イザナミ』に関する研究経過報告書（？）』

イザナミはとうやら自身の感情からSEEDフォームを生成している事が判明した。これにより理性を保つた今までのSEEDフォーム化の研究も、次の段階へと進む事が出来るやも知れない。SEEDが生物の持つ感情に関係している事は近年の研究から分かっていた事だが、それこそがSEEDの中核である事が、これによつて判明したのである。

(中略)

しかしこのイザナミの何と妖艶である事か。ここまで魅せられる研

究対象はやつやつ出会える物では無い。当該個体の処分の先延ばしを進言する。

『『イザナミ』に関する研究経過報告書（？）』

恐らくこれが最後の報告になるだろう。イザナミは隔壁を強力なS EEDフォームを使い突破し、研究所全体が今やイザナミの領域、星産み神話に出るあの世、ヨモツヒラサカと化している。

この部屋ももうそろそろ駄目かも知れない。

私は最後に言いたい。イザナミは神だった。イブヤザカを上り切り、誰も触れてはならない、開けてはならないヨモツヒラサカとの間を塞ぐチガエシを開いてしまった我々を、罰するべくして現れた、荒ぶる神だった。我々は、チガエシを開ける事の無いよう、もつと早くに彼女を処分すべきだった。だが、我々は好奇心に負けてチガエシを開いてしまった。

私は内部から全ての隔壁を閉じ、電子ロックの機構全てを物理的に破壊する事で完全に封鎖する事に成功した。この部屋の隣の部屋は全てのネットワークから遮断されている。その部屋で、今、全自动で希望を作っている。これを彼女の本体に挿入する事が出来れb

· · · ·

h

· · ·

h

· · ·

·

田を覚ます。そこは酷く閉ざされた空間だった。あえて例えるなら、棺桶や試験管等が近いかも知れない。

一番新しい記憶を探る。

確かに私は、燃え盛るカーシュ族の村から逃げ遅れた人を助け出して、森に燃え広がらないよう建物を壊して、それで自分を強制的に停止させる為にハンドガンで頭を撃つて・・・

そこで一つの重大な事を思い出す。と、同時に上半身を思い切り上げたせいで低い天井に頭を強くぶつけた。

痛みで更に頭がハツキリして来た。と、同時に左目からパノンや木のSEEDフォームから受信する映像が見えて来る。パノンはどうやら見慣れない船の中に居るらしかった。窓から見える景色から察するに、恐らくまだクロウドック地方なのだろう。木も同じような場所に居るらしかった。その様子から察するに、パノンも木も悪さをしていないようだつた。

悪さをしていない事に大きな安堵感を感じると共に、パノンの内の一つの視界にトニオが入る。トニオはパノンを見て訝しげに溜め息を吐くと、

目の前に設置されたカプセルのような何かを開けた。と、共に目の前の視界が開け、トニオの顔が直接見えた。

「よつ、お田覚めか?」

「え?」。中々ノ快眠でシた。

「そうか。にしても、いきなり自分の頭、ブチ抜くからビックリしたぜ・・・ま、大丈夫なようで何よりだけどな。じゃ、取り合えず口いつらうにかしてくれねえか? 襲つてきたりはしねえんだが、こう、気味が悪くてよ・・・。」

「ア、はい。ちょっと待つてテクダさいね~。」

そう返事をすると共に、子供達を一箇所に集める。集まった所で

頭の左側を大きく開き、開いた口で子供達を纏めて飲み込む。木も、パノンも、全て。

飲み込み終わった所で、適当なタオルをナlothransさせて取り出し、そのタオルで左目を眼帯のように覆う。

そして、大きく何度も深呼吸をして、手近な場所に腰を降ろす。

「終わったか？」

「ええ、ご迷惑をお掛けしました。」

「ああ、まあ気にすんな。所で、お前・・・」

「はい。・・・私は人型のSEEDフォーム、です。・・・すいま

せん、黙つてて。」

「そう、か。・・・なんつーか、なんだかなあ・・・何でお前は封印されなかつたんだ？」

「・・・私にも、よく分からないんです。」

その答えに、間違いは無かつた。このグーラー全体に存在するSEEDは全て葬られ、封印されたハズなのだ。どのようにして、どのような道具や兵器、施設を使ってそのような大規模な事を行つたのかは私にはよく分からないが、ともかく全てのSEEDは根絶されたハズだつた。なのに私だけは残つている。それがどうにも分からなかつた。

理由を幾つか考えてみるが、どれもこれも推測の域は決して出ない。図書館等で調べれば早いのだろうが、市民権はあるか戸籍や出生届に至るまで全てがまるで残つていらない私に、図書館に入りする権限は無かつた。

「そりゃ・・・SEEDは見敵必殺、見付け次第ぶち殺しが基本だが、お前のお陰でかなりの数の人が助かつたし、火が燃え広がるのも防げた。その点に関しては礼を言わざるをえねえ。」

「ええ。どういたしまして。」

「つづーワケで、お前が今度何かしでかしたら、俺がお前をぶっ殺しに行くって事で、良いか？」

つまり要約すると、『俺は気にしないぜ』的な事なのだろうと、何となく伝わって来た。だが、

「・・・すいません、私の命には、その・・・先約があるので。」「先約？」

「ライアと言う方でして。その人が、既に予約済みですのです。」「ライア・・・？ まあいい、そうか。じゃ、ダブルブッキングって事で良いんじゃねえか？ どうせ、一人だと手に余りそうだしな！」

そう言つてトニオさんがケラケラと笑い始める。その笑顔を見て、何だか貰い笑いをしてしまいそうになる。と、その時、一つの大きな事を思い出す。医療ポッドの天井に頭をぶつけたのも、そもそもそれが原因だった。

それはとても大切な事で、それこそ『人で無くなつてでも』守りたいと、何故かそう思えた物の事だった。

「あ！ そう言えばトニオさん、エミリアは大丈夫なんですか？！」
「おう、大丈夫だ。お前らの船に運び込んで寝かせといた。今はリイナが付いてるからな、心配は要らねえよ。」
「そうですか・・・良かつた・・・。」

胸を撫で下ろす。と、トニオが私の横に腰を下ろすと、一拍置いて話し始める。

「俺達はこれから、逃げた連中をとつ捕まえて色々と聞かなきやらねえ。ってなワケで、カーシュ族のボウズはそつちで預かつとい

てくれねえか？」

「私は構いませんけど、会社の方がどうかは、少し……。」「ま、お前が個人的に預かるって事にしどきや幾らでも融通が利くんじゃねえか？ 手当ては一通りしておいたからな、後は寝かせとけば勝手に起きるハズだ。」

「ん～・・・分かりました、それではお預かりします。」

「おし！ カーシュ族のボウズもエミリアも、もうお前らの船に乗せてあるからよ。じゃ、後は頼んだぜ！」

そう言うと共に、トニオが腰を上げると、私達の船にリイナを呼びに行く。それを追うようにして腰を上げると、水溜りのよつな物が視界に入った。それを覗き込みながら、タオルを少しずらす。そこには、『お前は人じや無い』とでも言いたげな、黄色く光る複眼が、顔のほぼ四分の一の面積を占めていた。

広い宇宙を、クラシド6に向つて、ゆっくりと、少し回り道をしながら飛んでいく。客室にはエミリアと、カーシュ族の少年。どちらも理由は違えど眠つているような状態である事に変わりは無かつた。

クラシド6に至るまでの道のりを、少し考え方をしながらゆっくりと飛ぶ。

私は、エミリアを守りたかった。それこそ、自分自身を捨ててでも。カーシュ族の村人達を生死に關係無く炎の中から運び出したのだって、きっとエミリアが気に掛けるだらうからだつた。

いつから自分はこんなにもエミリアに依存してしまつていたのだろうかと考える。最初は、ただのヒューマンの可愛らしい少女としか見ていなかつた。パートナーになつてから、なのだらうか？

そんな事をぼんやりと考えていると、通信が入つた。掛けて来たのはクラウチさんだつた。

「よお、今どの辺りだ？」

「ん~と~、今はクラマ海域のあたりですね~。」

「ああ？ そこはクラシド6との直線航路じゃねえだろ？ あーまあいい。とりあえず、お前の話を聞かせり・・・と、言いてえ所だが、通信機越しつてのもなんだしな、三十分後にカフュに來い。」

「いや、三十分は、ちょっと・・・。」

「どうしてだよ？ エミリアの容態は大丈夫らしいし、クラマ海域の辺りならター・ボ噴かしてぶつ飛ばせば三十分ぐらい余裕だろ？ 十五分でお釣りが来るぜ。」

「いえ、エミリアともう一人引き取つてしまつて。その子がそこそこ重傷なので、あまり飛ばすと身体に悪いかな、と思いまして。」

「ああ？ もう一人居るだあ？ つたぐ、メンドクセーもん増やしやがつて・・・分かつた！ んじやあ妥協して五十分後にカフエだ。これ以上はまけねえぞ？」

「はい～、了解です～。」

やう答えると共に通信を終わらせる。先ほどまでよりも少しだけ速度を上げて、クラッド6へと向ひ。

「おう、遅かつたじやねえか。先に一杯始めさせて貰つてんぜ？」
「すいません～、途中でローグスの船団とルートが交差してしまつて～。」

「あ～、やうか。すると、なんでこんなに早く着けたのが逆に氣になるな。」

「冗談ですよ～。本当は、少しゆっくりと飛んでいただけです～。
「そうか。んじゅま、取り合えず俺の話に入らせて貰うぜ。」

そう言つと共に、僅かに真剣な面持ちに変わる。しかしそれも、顔の面積の半分以上を占める毛によつて、イマイチ読み取りづらい物だったのだが。

「メンドクセーから結論だけ話すぜ。」

「ええ。」

「ワレリーは、クロウドッグ地方に行つた記憶が無いんだと。」

「・・・

「だが、気が付いた時にはカーシュ族の村に居て、周りがボンボン燃え盛つていた、だとよ。」

「・・・

「ヤツとは長い付き合いだ。・・・・・嘘はついてねえ。」

「・・・そう、ですか。」

やはり、洗脳なのだろうか？ しかしそれには不自然な点が多い。そもそも自我や記憶が曖昧になるような強力に意識を殺す洗脳は『突然切れる』と言う事はほぼ有り得ない。意識を殺すのにはかなり大規模な設備が必要だが、その意識をまた復活させるには、それと同等か、それ以上の規模の設備、いや、いつそ施設が必要となつてくる。

それこそ、ヘルメットやゴーグルなどの形状をした装置を使用した洗脳であれば、それが取れると共に洗脳が切れると言うのも頷けるのだが、そういう装置が外れたようにはとても見えなかつた。その他の洗脳方法では、確かに切つ掛けがあれば突然洗脳が切れると言うのも頷けるのだが、こちらは洗脳された人に、洗脳されている間の記憶がしつかりと残つてしまつ。

まったく新しい、イレギュラーな洗脳法があるのか？ だとするとあの黒服の男の危険度は、強さの数十倍以上の物となる。何故なら、その新しい洗脳法に対抗する手段が手元に無い上に、同

時に十人ほどの人数を動かしていた事から、かなり大規模な犯罪を行ふ事も可能であるからだ。更に言うと、もしもその洗脳法で同盟軍やグラール教団のような、大きな組織が乗つ取れるとしたらどうなるか？

SEED事変と同等か、心的被害ではそれ以上の大惨事が起こりかねない。

と、そんな事を真剣に考察していると、クラウチさんが、沈んだ空気を少しでも戻す為か、明るめの口調で、話題を変える。

「まあ、俺としては貸してたモンも回収できだし、それ以上、特に言つ事はねえよ。エミリアみてえな生きる足手纏いを抱えてた割りには、中々の仕事つぱりだと思つぜ？」

「あ、いえ～。エミリアもちや～んと役に立つてくれましたよ～？」
「エミリアがか？ ッハ！ 軽い怪我で氣絶する足手纏いを擁護するたな！ ま、これからも頑張つてくれよ～。お、そうだ。ここは俺の奢りつて事にしといてやるからよ。好きなだけ飲め！」

「はい～。ありがとうございます～。」

その二十分後ぐらいにチャエルシーから「エミリアがあつきしたヨー。」と言つ連絡を受けるまで、クラウチさんが後悔するほど飲んで食べた。特に甘さ5メガ倍プリンは四個ほど頂いた。

罰ゲーム用との事だったが、非常に美味しく頂いた。クラウチさんは会計の時に「一度と奢らねえ」と呴いていた。少し、悪いことをした気もしたが、気にしない事にした。

「あ、いたいた！」

その声に、素早く振り向く。そこにはエミリアの姿があった。少し心配そうで不安げな顔をしていたが、顔色 자체は非常に健康的で安心した。

「あら～エミリア～！ もう動いて大丈夫なの～？」

「あ、うん。全然平気。つてかそれよりさ、おっさんに呼ばれたって聞いたけど・・・もしかして、怒られた？」

「いえ～？ むしろ」馳走してもらつたぐらいよ～」

「あ、そりなんだ！ 良かつた～・・・つて言つたか逆に奢つてもらつたの？」

「ええ～。ちよつと顔色が悪くなる程度には食べさせて貰つて～。もう満足満足つて感じかしら～。」

そう言いながら、お腹を軽くさする。それを見てエミリアがその顔を少し綻ばせる。それがちょっと嬉しいと感じた時、本当に自分は、いつからこの子にこんなに依存してしまつたのだろつかと、少しだけ真剣に考えてしまう。

と、エミリアが思い出したように、少しだけ真剣な顔になる。

「あ、それとは別の話になるんだけど・・・一人だけで話したいから、マイシップまで来てくれないかな？」

「あら～、私の部屋じゅう黙れ～？」

「あそこメリー居るじゃん。」

「あーあー。」

取り合はず、マイシップまで移動する事にした。

「話したい事つて言うのは、さ。あの、カーシュ族の村での事、なんだけど。」

ミリアが椅子に腰を掛けると共に、神妙な顔で話し始める。

「あたし、あの時、黒服のヤツに飛び掛って、跳ね除けられてさ。で、その後、なんだけど・・・。」

「・・・」

「あたし・・・銃を突き付けられて、さ。それで、あの・・・戦つた、て言つのかな？ そんな感じの事を、こう・・・」

「ええ、そうね。」

「だよ、ねえ・・・あの体が勝手に動く感じ・・・夢、じゃ、無い、なんだよね？」

「ええ、そうです。夢ではありません。」

「へ？ だ、誰？！」

そうエミリアが言うと共に、エミリアの体から、まるで幽体離脱するよにして、異常に輝かしい女性が姿を現す。私は以前、一度会っている女性だった。

「ようやく、私の存在に気付いてくれたのですね、エミリア。」

「ちよ・・・何!? え、誰あんた!? い、今、あたしの中から出てきた・・・! ?」

「私はミカ。あなたの中に存在する、旧文明の民・・・。」

その言葉と共に、エミリアが頭を抱えて椅子の中で丸くなる。

「な、何つ? 頭の中に何か、流れ込んでくる… これは…・・・!」

「エミリア! ミカ、貴様エミリアに何ヲ・・・! ?」

「お、落ち着いてください! 記憶の共有をしただけです! 私の事は、改めて説明するよりも、こうして説明した方が早いと思つたので・・・。」

そう言つてミカが私の方へ手を向けて説得をする間に、エミリアが、頭中の事を順に理解し始める。

「え・・・嘘・・・なにこれ・・・こんな、ことが・・・?」

その言葉に、かなり険悪な空氣を纏っていた私と、ミカが反応する。

「エミリア?! 大丈夫?」

「あ、うん、多分。でも、これって・・・」

「・・・貴女の気持ちは分かります。ですが、これは紛れも無い事実なのです。」

「これ・・・つまりはあたし達の抹殺計画つて事でしょ・・・?」

「肉体を器と、精神を命と考えるのであれば、その通りになりますね。」

あの乗つ取り計画の記憶を、エミリアに入れたのだらうか。と、エミコアがこちらを向いて、話し始める。

「えつとね、聞いて欲しいんだ。あのさ、旧文明人が・・・」

「ええ、大丈夫よ。この前、エミリアが寝てる間に、ミカに聞いたわ。」

「え、あ、そなたは・・・ね、ねえリア。ちょっと、あの、改めて聞きたいんだけど・・・良い?」

「ええ、どうぞ。」

「あんたって・・・SEED、なの? あのレリクスでの事って、夢じゃ無かったの・・・?」

来てしまった。

意外な程早かつた。が、それでもこの数日間は、本当に幸せな時間だった。本当に、良い夢だった。

でも、夢は所詮、すぐに覚めてしまうものだつた。私は名残惜しさを感じながらも、吐き出すように言つた。

「・・・ええ。私は人型のSEEDフォームよ。あのレリクスでの一件は全て夢なんかじや無かつたの。・・・ごめんなさい、エミリア。ずっと、黙つてて・・・。」

「じゃあ、あんたは、あたしのせいで・・・」

「・・・?」

「あたしのせいで、一度、死んじやつたの・・・?」

「…………え……？」

重い沈黙が流れる。と、その現状を見たミカが、「これ以上は話せないと判断したのか、「落ち着いたら、また呼んでください。」とだけ言つてフツと消える。

エミリアが心中で何を思つているのかは、よく分からぬ。でも、私としては、予想だにしない発言に、頭の中がまるでフリーズ症候群のキャストのように止まつてしまつていた。

それまで私は、自分は死んで当然だと思つていた。むしろ、最も理想的な死に方だ、あのレリクスでの死だと、そう思つていた。だと言うのに、目の前の少女は、「死んでしまつた」と、「自分が死んで死んでしまつた」と、そう言つ。まるで、私が死んではいけないかのように、そう言つ。

私の左目から粘性の無い液体が、頬を伝づ。それを指で擦り、右目で見る。

それは真っ黒い液体だった。

何故、今、それが流れ落ちたのか。それは何となく分かつた。これはきっと、人ではない身体の、出来る限りの、涙だ。その黒い涙が、私に更に自覚させる。

「お前は人じやない」と。

私は、それをエミリアに伝えなければならぬと、そう思つた。私は俯きながら、エミリアに話しかける。

「…………エミリア……あのね、エミリア。」

「うん……。」

「私は、SEEDなのよ?」

「・・・うん。」

「人じや・・・無いのよ・・・?」

「・・・うそ。」

「だから・・・その・・・気にしないで?」

「そんな・・・そんなのムリよ!」

突然、Hミリアが声を荒げる。それに驚いて、俯きながら話していた顔を、思わずエミコアへと向ける。Hミコアの目には、涙が浮かんでいた。

「だつて・・・あたしのせいで、目の前から居なくなるのなんて・・・

・もうヤだよ、そう言つのは・・・。」

「でも・・・私は、人ですら無いのよ? だから・・・」

「だからつて! だからつて・・・・・・・。」

Hミリアが声を押し殺しながら泣き始める。それに釣られるようにして、私の左目の黒い液体の量も増える。その液体の量は、白かつた眼帯代わりのタオルを真っ黒く染め上げてお釣りが来るほどの量だった。

何よりも、自分が情けなかつた。

何故、目の前の少女の涙を止めてやる事が出来ないのか。

何故、目の前の少女は泣かなければならないのか。

彼女の涙の、全ての原因は私にあるし、その涙を止める術が分からぬるのは、私が人では無いからなのかも知れない。

目の前で流れる涙を止められない自分が、どうしようも無く情け

なかつた。

暫くして落ち着いたのか、Hリリアが話し始める。その内容は、自分が本当に掺めに思えるほど、前向きだつた。

「あのわ・・・あたし、ここの仕事向いてないと思うし、戦うのも、好きじやない・・・けど、向いてなくても、耐えるから。戦い方とか、私に教えてよ。」

「え・・・」

「だつて、あたしがもつとちやんとしてれば、あんたが死ぬような事も無かつた訳だし・・・。だからむ、その・・・」

「・・・」

「たぶん、まだ色々と、迷惑掛けねやつかもだけど・・・でも、あたしのせいで誰かが居なくなつちやわ無いように、ちやんと、戦えるようになりたいんだ。だから・・・」

「・・・」

「その・・・人とかSCEEDとか関係無しに、あんたは私の命の恩人だからさ。だから・・・居なくなつて欲しく、無いんだ。」

「・・・Hリリア・・・。」

一つ、大きく深呼吸をする。呼吸すら必要無い身体に、空気を一杯に吸い込み、そして吐き出す。

「ええ～、勿論よ～。これまで以上に、バシバシじごいで上げるからね～？」

「・・・うん！　あ、でもあんまりキツイのは、ちょっと・・・」

「問答無用よ」　とは言え、今日はもう疲れちゃったし、明日からでも良いかしら？」「

「あ、言われてみればそっか、朝からずっと働きっぱなしだったつけ。んじゃ、また明日！」

「ええ～、また明日～。」

Hミリアが、船から出て行くのを見送つてから、一人で、少しだけ物思いにふける。

「人とかＳＥＥＤとか関係無しに、か・・・。」

「あ、ご主人！　ボクを置いて出かけるなんて酷いじゃないか！」
「ん～、ただのお仕事だったのだけれど～？」
「なんだ。なら良いや。ああそうそう、ご飯の仕度はまだだから、先にシャワーでも浴びて来てよ。」
「そうさせて貰うわね～。あ、いつも通りに少なめで良いからね～

？」

「毎回言われなくても分かるよ。ボクはポンコツじゃ無いからね。」

そう言つてキッチンへとパタパタと駆けて行くメリーを見送つて、シャワーを浴びに行つた。その時だつた。今まで身体を細かく変異させて誤魔化していた、重大な事を思い出したのは。

「あ、穴が……。」

本当に、上から下まで。胸の谷間部分にも穴が。この服はそこそこ良いお値段がする代物なのだが、もうほとんどボロ布も同然の有様だつた。

「……あノヤろウ…………次は『ロス、必ズニロス…………。」

「

ぶつぶつと呪詛の言葉を並べながら、シャワーを浴びた。シャワー室の前でメリーが呪詛の言葉の数々に怯えて縮こまつて膝を抱えて耳を塞いで震えていたのは、メリーと私だけの秘密だ。

第七話「あなたにだけは、知つていて欲しい。」（後書き）

ヒヤツハー！　これにて第一章完ダア！！

そしてサブタイは毎度お馴染みSUM41のWith me超訳
ダア！！

これからは洋楽の歌詞の超訳からサブタイ持つて来ようかな。
あ～、だつたら最初の三話のサブタイ考え直さなきやな。

ってな訳で、次はマクマホンミキサーといつ名の幕間を挟みたい
と思うちゅうのですが、皆さんにアンケを取りたいと存じましてご
ざいますですだよ。

A

B

C

以上三つの内、どれにティンと来ましたか？　コメントのラスト
にこつそり何れか一つを入れてくださいな。それによつてちゅうつ
と変わつたり変わつたりするかも知れませんぜ。

あ、あとオリジナルな武器を使いたいと思うちゅうんですが、ど
うでしょ？　だいじょぶですかね？　その辺りの意見も含めて、
コメントをたつふり頂けると嬉しいです！　もしかしたらまたハン
ドレッジ執筆パワーが掛かるかも知れませんよ？

ではまた御機嫌よう、ハラショー！！（ド・ス風）

第八話（聞）「コア・ゲートのやけに長く休日」（前書き）

ハラショーハラショーハラハラショー……！
こんばんわこんにちわおはよひ〜ぞこまほじめましておひさし
ぶり！……！ほのほのな日常回ですよ！正直、書いてて気持ち
良かつたです！ええ、非常に気持ちよかったですとも……では、
お楽しみください！……！ンションゴリ押し……！？あ聞こえな
いなあ……！

第八話（闇）「ニア・ゲートのやけに長い休日」

「ん~・・・イマイチ、ねえ~・・・。」

H//リアが「えつ」と言いつてこちらを振り向く。

「え、今の結構上手く捌けたと思つたんだけど・・・何処が悪かつたかな?」

「あ、重心が高すぎてちやんと刃が入つてなかつたわよ~・・・つていうのじゃ無くて、この銃の調子が変なのよ~。やっぱりこの前の戦闘で数発貰つてたみたいでね~、撃つ度にフレームがガタガタ言つのよ~。困ったわ~、まだモトが取れて無いのに~・・・。」「へ~・・・ちょっと見せて。」

いつも言つて私からハンドガンを奪い取るH//リア。それを嘗め回すよつてじつくじと、隅々まで見て行く。途中途中で、「ふ~ん」だとか「あぢや~」とか呟きながら眺めてから、感想を付けて私は返す。

「もう駄目だね、それ。あと三発撃つたら機関部から弾けると思つよ。」

「あらそう~?」

そういうながら、真後ろに振り向きながら立て続けに三発、ヴァーラの右目だけにピンポイントで撃ち込み、目の後ろの脳を破壊して殺す。

と、三発目の弾丸を吐き出すと共に、銃がグリップと銃身の先端部だけを残して弾け飛ぶ。

「あらほんとね。」

「ん~、でもこれは困ったね。あ、アタシのハンドガン貸そつか?
一応、メンテしてあるから故障とかはしないだろ?」

「あらあら~、『メンねエミリア~。それじゃ、借りるわね~?』
「うん。」

エミリアからハンドガンを借りると同時に、真後ろのヴァーラのアゴにソバットを入れる。アゴが破壊されて仰向けに地面に倒れたヴァーラの口の中に踵を刺し込みながら、後ろの数匹に立て続けにトリガーを引く。当然、全て急所は外してある。手の先などを撃たれて怯んだヴァーラ達に、エミリアが斬りかかる。その動きは、まだ素人の域は出ない物の、随分とサマになつて見えた。やはり心構えと言うのは大事な物だと、強く感じた。

と、同時に足の下でもがいていたヴァーラの口の中に刺し込んでいた足を、更に奥へと沈めていく。そしてある程度行つた所で硬い物にぶつかる。恐らくは背骨か何かだろう。

それを、ヴァーラの目を見てから、踏み碎く。それと同時に大きな血管も踏み貫いたらしく、ヴァーラの口から血の噴水が起こる。私はそれが収まるまで、足を抜く事はしなかった。

それから、大きく育ち過ぎて農家の手に負えなくなつたゴルドルバを狩つて依頼を終えると、船でクラッド6へと帰還する。

その日はゴルドルバの驚くべき逃げ足と、賞賛に値するほどのタフさのせいで、日がかなり傾いてしまつっていた。エミリアにマックスプラス3トレーニングのやり方を教えて、明日は仕事を休んでトレーニングをするように言つと、その日はそのまま解散となつた。

「と、言ひつけで～、ついでに武器も送つてください。」

『あたしゃお前さんの財布かい！　ま、別に構わないんだけどね。分かつた、お前さんにとってはトビツッきりに因縁深いヤツを、送つてやるよ。』

「あらあら～？　なんでしょう～？」

『ふつふ～ん、さあね～？　・・・所で、カーシュ族の村の一件。現場付近でSEEDフォームを見掛けた消防隊員が居るそうなんだけど？』

「・・・言わなくちゃ駄目、ですか？」

『強制はしないよ。ただ・・・お前さん、一時的にでも『戻つたんだろう？　身体とかは大丈夫なのかい？』

「ええ、問題ありません。心身共に、今の所は安定しています。』

『そつか・・・ま、お前さんが完全に戻つちまつたら、アタシが責

任持つて真っ先にブチ殺しに行つてやるから、安心しなよ。』
「あ、それなんですけど、トニオってビーストの人の予約も入つてしまつて。」

『トニオ？ トニオって、まさかトニオ・リマツテヤツかい？』
『あらあら～、お知り合いだつたんですか～？』

『ああ、ちょっと前まで同僚でね。・・・ん？ まさかアンタ、ト

「オのヤツに正体・・・』

「ええ～、少し事故つてしまつて・・・。」

『そろかい・・・で、殺されずに済んだのかい？ アイツも随分と丸くなつたモンだねえ。』

「あら～、そりなんですか～？」

『おひ、昔のアイツときたらそりゃあ悪ガキでせー。』

「あらあら～。」

『つと悪い、もう時間だ。そんじや、明日の朝には『届くよ』にするよ。じやあな～！』

「ええ～、それでは～。」

デジフォンの電源を落とす。とりあえず今の所は武器が無いので強制的に休業の有様だ。HIMICIAにはマックスプラス3トレーニングを課しているので、完全にやる事が無かつたりする。

手持ちのお金は割りと貧相なのが、折角のリゾート型ロロニーだ、とりあえずショッピングフロアの辺りまで繰り出す事にした。

流石はリゾート。ナンパ率がハンパじや無い。女性を現地調達して楽しもうと言つ青年がやたらと多い。先ほどショッピングフロアに入つてから、既に四回ほどナンパされている。

私はそんなに軽い女に見えるのだろうか？ それとも見境無しだらうか？

それにしても先ほどの男には驚いた。まさかナンパするキャストがこの世に存在するなんて、初めて知った。

G R M 社も一体何を考えてあんな思考ルーチンを組み込んだ電腦を作つたのだろうか。もしかしたら元ヒューマンだつたりするのかも知れないが、身体を失うような大事故に見舞われた経験があるにしては色々と軽い印象を受ける男性だった。

そんな事を考えながらコーヒーを飲んでいると、「ちょっとそこのアナタ！」と言つ男性の声が聞こえて来た。変わつた喋り方の男性も居るものだと思いながら携帯端末で推理小説を読んでいると、後ろから肩を叩かれる。

「アナタよア・ナ・タ！」

「あ、あら～？ なんでしょ～？」

私の顔を見ると共に、驚愕したような、衝撃を受けたような、眉

間に銃弾を入れられて即死したような表情をする男性。しかしその目線はもの凄い速さで私の身体を上から下まで何度も往復する。そして、私の目を見てから、瞳をもの凄く輝かせて私の手を握つてくれる。

「ティンと来たわ！！アナタ、ちょっとワタシに付いてきなさい！」

「！」

「ん～、やつぱり最高だわ！　ワタシの目に狂いは無かつた・・・！」

「」

「それはどうも～・・・あ、次はこうですか～？」

「そうそう良いわ良いわ最高よお・・・！　アナタ、以前にもこう言つ仕事した事があつて？」

「いえ～、無いです～。」

「それにしては随分と心得てる感じじゃない？　あ、もう少しだけ肩を上げれるかしら？」

「あ、はい大丈夫ですよ～。そうですか～？」

「ええ、凄く良い感じよ。ちゃんと言わなくとも目線くれるし、ホ

ント素人とは思えないわ。はい、これで終わりよ。・・・つふー、

ここまで気持ち良くな写真が撮れたのは久しぶりね。ごめんなさいねえ、いきなりココまで拉致して来ちゃって。でもお陰でホント助かつたわあ、不健康な肌のモデルってクラッシュには居ないのよねえ。

「いえいえ、それで、あの、約束通り・・・」

「ええ、ワタシがアナタにピッタリの服をチョイスしてあげるわー！」「ありがとうございますー！」

肋骨の下ギリギリまで切り詰められたノンスリーブのブレザーに、ベルトと同様のトランプ柄のネクタイが緩めに締められ、二の腕まで到達するほど長いレザー素材の指だし手袋が両腕を覆っている。前髪はエクステンションで追加されて、オシャレ値札付きのトランプの柄が沢山入った帽子を斜めに被っている。

もしも「悪役ですか?」と聞かれれば、「はい」としか答えられそうに無いほどに大胆な服装だ。何より問題なのは、いくら綱タイツで覆われているとはいえ、動くと太股どころかお尻まで見えてしまいかねないこのスカートだ。これはどう考えても戦闘職には向いていない。

「ですが、これは動き難いと言いますか? . . .」

「あら、もしかしてアナタ動くお仕事だったの? ならそう言つてくれれば良かつたのに。選びなおしてくるから、少し待つてね?」

そう言つと共に、また奥の超規模のクローゼットのような部屋へと消えていく。その背中に、聞こえるよつて言つ。

「出来ればストーリアが良いんですけど?」

「イメチェンの為にストーリアは禁止よ! それと、おへそと足はドンドン出して行くわよー!」

「これならどう？ 動き易い上に、バツチリ足もおへそも見えるわよー。」

「あらー・・・」

下着と見紛うほどに短くタイトな黒のショートパンツに、ギリギリ膝下ぐらいの踵低めの黒いロングブーツ。黒の無地のヘソが出る丈のTシャツに、胸を覆える程度の丈の黒いジャケット。手には甲が露出する黒い手袋をはめている。

露出した病的に白い肌と黒い服がコントラストを奏でており、非常に似合っている事は確かだ。しかしこれは・・・

「これ、悪役・・・っぽいですよねー・・・？」

「ええ、そうにしか見えないわね。だって仕方無いじゃない？ アナタほどナチュラルに黒が似合う人ってそういう居ないんだから。そんな逸材見つけちゃつたらワタシだって黒を選びたくなっちゃうわよ！ さ、どう？ これで良いかしら？」

「ん~・・・」

とりあえず、これは似合っている似合っていないで言えば圧倒的に似合っている。足がスースーするのも新鮮な感覚だし、何よりこれ以上この人を困らせるのも問題だと思つたので、コレで良いだろうと結論付けた。もつとも、お金を貯めてストーリアを買い直すつもりなのだが。

「・・・そうですね、イメチョンって言つなり、これが良いですね。はい、それではありがとうございます。」

「気に入つていただけて幸いだわ。」

「はい、それでは。」

「あーちょっと連絡先だけ教えてくれないかしら？　またモテル頼むことがあるかも知れないから。」

「あ、はい。どうぞ。」

とりあえず、連絡先を交換する。その時になつてようやくこの男性の名前が、『アルフレッド・リビングストン』と言つ中々に威厳の有りそうな名前である事を知ったのは秘密だ。

「それじゃ、今日はどうもありがとうねー。お陰でボスにも良い写真が渡せそうだわ！」

「あらあら。それでは、これで。」

「それじゃあねー。」

そう言つて別れを告げ、ワインディング・ピングを楽しみにショッピングフロアへと戻つてこぐ。

流石のチョイスでナンパ率が先ほどより五割り増しになつたのは内緒だ。

「エミリア～、調子はどうかしら～？」

「あ、リア。今丁度終わつたところ・・・つて、あんた服着替えたの？ つて言うか服買つほどお金あつたの？」

そう言つて汗を拭きながら、こぢらを見て少しだけ驚いた表情をするエミリア。もうお昼時なので、そろそろ終わつてている頃だろうと思つたが、ビンゴだつたらしい。

そんなココは、クラッド6内部にあるスポーツフロア内の一区画である、スポーツジムエリア。古今東西南北のありとあらゆるトレーニングマシンが設置された、それなりの広さを誇るエリアだ。

身体を絞るご婦人方や人間凶器のような肉体を持つ傭兵、それにスカイクラッド社お抱えのスポーツマン達とそのファンの方々が一様に介するこのフロアは、ただトレーニングをするだけの場所にしては意外な程に人で賑わつてゐる。

「んふふ～、良いでしょ？ バイト代の代わりにタダで貰つたのよ～」

「へ～・・・何て言ひか、凄く・・・悪役だね。」

「気にしてるんだから言わないでエミリア～・・・。所で、マックプラス3トレーニングは終わつたのよね？ それじゃ、ちょっと食べに行きましょ？」

「え、でもお金無いんじや・・・」

「あらあら、大丈夫よ～？ 一日ご飯抜いたからつて死ぬ訳でも無いんだから～。」

「いや、それならやつぱり、自分のお金は自分で出すよ。」

「ステーキハウスなんだけれど～？」

「う・・・ま、まあ多分大丈夫！ 平氣、きっと、多分、恐らくは・

・・。」

「無理、しなくても良いのよ～？」

「むしろ率先して無理しようとしてるのはあんたじゃん……。
んまあ良いや。奢つてもらえるなら奢つてもらひちゃおつと。」

H//リアがトレーニングウェアから私服に着替える間に、私は三回ほど声を掛けられた。何だろつ、そんなにこの辺りの人達は飢えているのだろうか。ちなみに、その内の最後の一人は少し強引に迫つて来たので、指と足の甲を碎いてあげたら随分と大人しくなった。なるべく音を出さないようにしたのだが、やはり少々注目を集めてしまつたのは悔やまれる所だ。

「づくまる男性を尻目に、H//リアとショッピングフロアのフードH//アベに行く事にした。

「ねね、ここまで来とつてなんだけどさ、ホントに良かつたの?
その、奢つてもらひちゃつて……。」

「あらあら～、別に良いのよ～？　だつてH//リアがちゃんとトレーニングやつた、そのご褒美だもの～。」

「「」褒美か～・・・なんだかそう言わると、なんて言つか・・・
あ、ステーキ来た！」

と、素晴らしいタイミングでステーキが到着する。店員が、「鉄

板が熱くなつておりますので、お気を付けて、お召し上がりください。」言いながら、テーブルの上にステーキの乗つた鉄板を置く。ステーキからはジュー・ジューと言う良い音と、醤油ベースと思われる香ばしいソースの香りが立ち上がつてゐる。と、その横にスープとご飯の大盛りがそつと置かれる。

スープのお椀は小さいが、ご飯はステーキと一緒に見ても、若干多く感じるぐらいの量があつた。

「あら～、思ったより大きいのね～。さ、冷めないうちにどうぞ～？」

「いつただつきまーつす！」

テンション高めで食べ始めるエミリア。先ほどまでの恐縮ぶりが嘘のようだ。こつして見ると、本当に子供にしか見えない。と、エミリアが付け合せのグリーンピースをそつと避けるのが目に入った。

「エミリア～？　付け合せも含めて完食しないと払つてあげないわよ～？」

「むぐ～　むぐぐ・・・」

口の中のご飯を咀嚼しつつ飲み込むと、渋々と言つた様子でグリーンピースを先に、飲み込むようにして食べ始める。どうやらエミリアは、嫌いな物を先に食べててしまう派らしい。

グリーンピースを食べ終えると、またステーキご飯とスープをリズミカルに食べ始める。

その内に私の頼んだ、エミリアの物より一周りほど小さなステーキが到着する。

このステーキハウス自体は業界大手のチェーン店であり、多くのアルバイトを抱えている事や値段が安いことなどから冷凍食品なのでは無いかと言われているのだが、それにしても美味しい。そして

この醤油ベースのソースは、ニユーデイズに本社を置くこの店らしい、ステーキの脂っぽさが六割軽減されるほどあつさり味となっている。非常に美味しい。

余談だが、ニユーデイズではステーキと言つ食べ方その物が流行らないせいで、このステーキハウスの本社はニユーデイズだが最も大きな勢力を持つのはモトウブだつたりするらしい。ローグスやなんかも、この醤油ソースのステーキに舌鼓を打つてているのだろうか。食べ終わつて会計を済ませる。値段はやはり思つたほど張らなかつた。この良心的な価格も、大手チェーン店の魅力だろう。

店を出てから、エミリアが行きたいと言う所に付き合つて色々な所を周る。洋服店に始まり、ゲーム屋、フィギュア専門店、CD店などなど。途中で親友に明日の朝に武器を届けてもらえる事などを話しながら、物を買つたり買わなかつたりしつつ、ショッピングフロアをぶらついた。そうして最後に入つた店が、ぬいぐるみやキャラクターグッズの売つている店だった。

「あらあら～。」

そう言いながら大きめのパノンのぬいぐるみを手に取る。もふも

ふむにむにしていて、非常に手触りが良い。本物に比べて圧倒的デ
フォルメされているし、何より一分の一定程度の背丈
しか無いのだが、じつと見ていると何故かキュンと来る。その腕
をぴこぴこと動かしながら、適当にアテレコを付けてみる。

「Over my head! Better off dead!
！」

「いや、何でそこでそんなセリフ付けるのよ？！ って言うかどう
してそのセリフをチョイスしたの！？」

横からエミリアに突っ込まれたが、あまり気にしない事にする。
買おうかと思い、それに付いていた値札を見て愕然とする。丁度、
ステーキ一食分に色を付けたぐらいの値段がした。これは流石に買
えない。諦めて棚に戻す。

それからエミリアが、私が置いたぬいぐるみを手にとって値札を見
て「うわっ」と小さく漏らしてから、すぐに棚に戻す。その後、
エミリアはその店に売っていた『ファイアフライ』と言うスカイク
ラッドの口「を背負ったメタルファイターをデフォルメした、小さ
めのぬいぐるみを購入していた。

「それじゃ、もう帰りましょうか？」

「うん、やつだね。で、さつき話してたけどさ、ホントにちゃんと明日の朝に武器着くの？ 明日も仕事請けないとかってなつたら・・・」

HMLIAがそのままに言つと、私の携帯端末が鳴り始める。

「「めんなさこHMLIA～、ちょっと待つてね～？」

「あ、うん。つてがあたしむづ帰るからさ。じゃねー！」

やう言つてばたばたと駆け出すHMLIAの背中を眺めながら、私の安くて古いせいで音声のみの携帯端末を開く。聞こえて来たのはチエルシーの声だった。

「今おヒマかしら～？」

「ええ～、一応は～。何か書類に不備でもありましたか～？」

「ウウン、そうじや無いのヨ。ただネ、チヨーット変な依頼が入ったカラ、アナタに頼もうと思つてネ。」

「ええと～、武器が無いんですか～？」

「アア、このお仕事、武器要らないのヨ。」

「武器が要らないお仕事、ですか～？」

「りあせんせー。なんでおめめのしろいとこがくろいの一ー？」

「ん~、そうね~・・・」いつちの方が、ちょっとオシャレでしう

う?

「えー、ボクこわーい。」

「わたしもー。」

「あらあら~。」

さて、今私は何処に居るのか。惑星モトウブにある、SEED事変によつて身寄りの無くなつた子供を育てる、養育施設に来ているのだ。もっと分かり易く言うならば孤児院か。

そんな所に何故居るのか。それは仕事だからだ。何でも、孤児の人数に対してもスタッフが圧倒的に少なく、更にその大事なスタッフの一人が風邪をこじらせてしまつたらしく、完全に手が回らなくなつてしまつたそうだ。ちなみに今、全く同じ依頼でバスクと言う男性のキャストも一緒に居たりする。海底リリクスで私に話し掛けて来た、あのキャストだった。

「久しぶりだな」と言われて、一瞬誰か分からなかつたのは『愛嬌。私がリトルウイニングに担ぎこまれたのとほぼ同時に、たまたま仕事で一緒になつたクラウチさんに誘われてリトルウイニングに入つたらしい。何でも、「フリーはもうキツイと思つていた」との事。

その意見には同意せざるを得ない。リトルウイニングのように、軍事会社だと事務的な手続き等がしっかりと行われるし、依頼の裏側

の方の調査も別でやつて貰えるので、非合法な依頼と言つのはほぼ有り得ないのだが、フリーだとそうも言つてられない。

事務的な手続きはほとんどあやふやだし、裏側の調査も一人じや出来ないので、気が付いたら強盗の片棒を担がされているなんて事はよくある話で、慎重にそういう類いの依頼を断るにしても、そういう類いの依頼ぐらいしか来ないのだから選びようが無いのだ。何より、事務的な手続きうんぬんがあやふやなせいで、報酬を貰えないなんて事もしょっちゅうだつたりする。

しかし、だからと言つて誰でも気軽に軍事会社に入れる訳では無いのだ。軍事会社と言うのも、有る意味では一種のサービス業だ。サービス業と言つたら、信用がまず第一に来る。となると、やはり厳しくしてくるのは身元調査だろう。

例えば強盗犯に銀行の警備を誰が依頼するだろうか。

例えばシリアルキラーに要人警護を誰が依頼するだろうか。

そう言つ事を考えていくと、どうしても身元不明瞭な人は、どんなに優秀だったとしても入れる訳には行かなくなつてくる。これが普通だ。

だが、この辺がリトルウイングはオカシイのだ。実力さえあれば前科持ちも歓迎なんて、サービス業としてはあつてはならないスタイルだ。しかしその反面、他の軍事会社の追随を一切許さない程に、依頼料が安い。

それこそ、他の軍事会社を小売価格とするならば、リトルウイングは差し詰め卸売り価格と言つた所か。本来ならばそこまで安く出来ないハズのサービス業の依頼料を、リトルウイングはまさかの信頼を犠牲にする事で可能としているのだ。

それでも倒産したりしていなのは、社員が現場で悪さをしていない事に起因する『無いのに有る信用』と、それこそ子供のお小遣いでも依頼出来る程の依頼料の安さのお陰だろう。

お陰で、出所不明瞭な怪しい依頼も含めて、小さい依頼なら意外と多く入つて来ている。一つの依頼でガツポリ稼ぐのも、大量の依

頼でチマチマ稼ぐのも、過程は違つても最終的な金額は変わらないと言つ事だ。

まあ何にせよ、余りにも依頼料が格安なせいで、その依頼の中には今回の保母さんのピンチヒッターのように、軍事会社として果たして受けて良いのかと聞き返したくなるような物も含まれていたりするのだが。

他にもメタルファイターによるヒーローショーの悪役や、サイン会の警備員、害虫駆除にスクールの送迎バスの運転手も依頼される事があるらしい。

「せんせーのおめめSEEDみたーい！」

「あらあら～。それじゃ、襲っちゃうわよ～？」

「わー！こげるーー！」

「わやーー！」

私は子供が好きだ。いや、ロリコンだとシヨタコンとか、そういう言ひ事では断じてない。愛玩動物等に向けて可愛らしいと思つような感情であつて、恋愛感情とはまた違つた物だ。

ともかくそういう言ひ訳で、今の仕事も何だかんだ言つて楽しかったりする。まあ、軍事会社の仕事では無いとはおもつては居るが。それでも楽しいものは楽しいのだ。

ちなみに、バスクは最初の方こそ怖がっていたが、すぐに打ち解けてしまつっていた。その手際を見る限り、どうやら年少者の扱いにそれなり以上の心得があるらしかつた。バスクが子供達と遊ぶその姿は、休日に稀に見られる親子連れのようだつた。

不意に、自分も昔は父親にあんな風に遊んでもらつたことを思い出して、胸が少し締め付けられるような感覚に襲われた。

両親は自分の手で殺してしまつたし、妹もSEED事変の戦火に飲まれて死んだと聞いている。実際に妹の遺体に会つ機会は無かつたが、ライアさんが嘘を言つとも考え難い。

ああ、そうだ。今思い出した。私は子供達に懐かれて良いような、そんな物じや無いんだった。この子達の両親や兄弟を奪つた物と、同類なんだつた。

そんな事を考えながらバスクの方を眺めていると、不意に私の足の後ろ辺りに体当たりをされたような感触が伝わる。足のその感触のあつた辺りを見ると、『ユーマンの男の子が無邪氣な笑顔で私を見上げていた。

「これで、全員寝付いたか？」

バスクがなるべく小さい声で私に聞いてくる。その声で目が覚める。ウツカリ子供達と一緒に寝てしまつ所だつた。

「え、ええ～。そうですね～。」

「では、そろそろ帰るとするか。こちらで午後九時頃なんだ、クラシド6に着いた頃には午前五時ぐらいになるな。」

「ええ～。それでは、操縦はお任せしますね～？ 私もう眠いので～。」

「む・・・まあ、そうだな。居眠り操縦で小惑星にぶつかられては堪つたものじやないからな。そつだな、俺が操縦しよう。うむ、それが良い。」

「？」

バスクの様子が何処か変だ。私は養育施設の園長に仕事の終了を報告して、来た時に乗っていた、いつも使つてゐる船に乗り込む。

続いてバスクが乗り込み、操縦桿を握る。が、微妙に様子がおかしい。

「緊張してるんですか？」

「いや、そんな事は無いぞ？ ただ・・・」

「ただ？」

俯いて、目線を逸らしながら、恥ずかしそうにバスクが言つ。

「・・・中型以上の、船の操縦を・・・した事が無いんだ・・・と、言つた・・・小型の免許しか、無いんだ・・・。」

結局、法律的にも操縦的にも危険なので、眠い目を「一ヒーで無理矢理覚ましながら私が操縦することになつたのは、言つまでも無いだろう。

第八話（聞）「リア・ゲートのやけに長い休日」（後書き）

如何だつたでしょうか？次回から三章に入つていきますよ！
そして、前回と同じ内容でアンケートを取ります！是非是非是非是非是非
非！「参加ください！！！」あなたの投票で、リアの過去とその他モ
ロモロが変わるかもしれませんよ！！！　あ、ちなみに、前回投票
していただいた方も、また投票していただいて構いませんので、ガ
ッシガツシ投票ください！！！！

A 箱

B 壴

C 目

ではまた！「きげんようソローッハラショー！

追記：PSPが壊れてしまったので、次回更新は大きく遅れると
思います。申し訳ありませんが、「了承の程、よろしくお願ひ致し
ます。

No.9 「Welcome to hell!-!」(前書き)

悪い夢の話です。本編とはあんまり関係無いハズ。
正直、幕間一連つて誰得・・・。

No.9 「Welcome to hell!—」

「つふ～・・・ただいま～・・・。」

「おかれり。随分と遅かつたね。それに男の人と一緒にだつたんだつて？」

「ええ～、そうよ～。」

「シたの？」

「シて無いわよ～。それとメリー？ 女の子がそんな事を言ひちゃダメよ～？」

「え、いや、だつてボク、元々ソツチ系目的で作られだし・・・。
「だからつて、そんなに堂々と・・・ふわあ～・・・」

「寝不足？ やっぱりシテ來たの？」

「キヤスト相手じやする事も出来ないわよ～。それより、眠たいからちよつと寝ちゃうわね～。朝方に荷物が届くと思うから、受け取つておいてね～。」

「はいはい。で、何時頃に起こせば・・・」

「ZZZ…」

「・・・寝ちゃってるし・・・。ま、いつか。」

Prrrrrrr Prrrrrrr

オティスが遠慮無しに無線を掛けて来る。コッチは今、ゾンビ共のド真ん中を、スーパーの店長が使っていたゴテゴテに凶器を満載したカートで突つ切つてる最中だつてのに。放置しても良いのだが、もしも急ぎの用事だつた場合を考えると、それも得策じゃ無いようと思えた。

丁度ゾンビが少ない所に出たので、そこで無線機を取り出して耳にあてがう。オティスの少しテンションの高いしゃがれ声が、無線機から聞こえて来た。

「おいつランク。眼帯を巻いた顔色の悪い美人が、フードカートで堂々と寝てるのを見付けたぞ。腹とか足が出るような服を着とつたからな、風邪をひかんように守衛室に連れて來た方が良いんじや無いのか？」

「そうじゃ無くとも、このゾンビがクソ多い中で寝てるなんて、明らかに自殺行為だろう。分かった、どうせ近いしな。直ぐに行く。」

そう言つて無線を切ると、またカートを押して移動を開始する。それにもこのカートは素晴らしいな。異常に重いお陰でゾンビの群れに突っ込んで押し負け無いし、凶器が良い感じにゾンビを切り刻んでくれる。もしかしたら、この凶器の配置は試行錯誤の末なのかも知れない。そう思う程に、効率の良い凶器の配置だった。あの店長、「6番レジへどうぞ」と叫んで死に絶えた辺り、元からかなりヤバかったのかとも思ったが、それでも無いのかも知れない。

そんな事を考えながら、カートを全力で押しつつホールドバーへと向づ。

フードコートのテーブルの上で、すやすやと心地良い寝息を立てながら、何故襲われずに済んだのか分からぬ程に堂々と女性が寝ている。

オティスの言つ通り、東洋系の顔つきの中々の美人で、腹とか足が露出した服装をしており、その服装はさながらビジュアル系ロックバンドのようでもあった。

そしてこれまたオティスの言つていた通り、顔色が非常に悪い。と言うよりも、肌の色に生氣を感じない。しかし胸はしつかりと上下に動いている辺り、生きては居るのだろう。ゾンビにしては異様に皮膚も服も綺麗だし、多分人間で合っているハズだ。

とりあえず、眠つたままでは色々と不便なので起こす事にした。

「おい、起きろ。」
「んむん～・・・」
「おい。」
「ん～・・・」
「おい！」
「ゾンビ！」

まるで起きない。と言つたか、或いは狸寝入りなんじや無いのか？
そう思い、カートと一緒に乗せていたショットガンを取り出すと、近付いてきていたゾンビに一発、発砲する。

辺りには乾いた破裂音と、骨格が碎けて血が飛び散る、生々しい音が響き渡った。

しかし、それでも女性は起きない。

「はあ・・・参ったな・・・。」

いつそ、背負つて守衛室まで連れて行こうか。そう考へながら、中々にセクシーな体勢で寝ている女性をカメラに収める。

良い足、そして良い胸だ。腹筋も鍛えられているのか割れしており、この引き締まった感じも中々にそそられる物がある。

そんな風に眺めていると、どうにも不恰好な、タオルを簡単に巻いただけの眼帯が気になってしまつ。それこそ、海賊映画のような黒のシンプルでスタイリッシュな眼帯なら、もつと似合つのではないか。

そんな事を考えていると、気が付いた時には、右手が眼帯の方へと伸びていた。

そして眼帯に触れるか否かの所で、目に見えないようなスピードで女性の手が動き、俺の右手を捕らえる。

「！？」

「・・・・・・」

俺は驚きの余り、言葉を失つた。いや、手を恐ろしい程の速度で掴まれた事にも当然驚いたのだが、それ以上に、彼女の目を見て驚いてしまつた。

彼女、白目の部分が黒い。

白目の部分は全てが黒く、そして瞳は黄色、と言つよりも金色のよう見えた。

そして、沈黙していた彼女が、周囲を目線だけで見渡し始める。そしてようやく周囲の異様な状況に気付いたのか、手を握つたままで、俺の顔を睨むようにして質問・・・いや、尋問を始める。

「貴方、名前は？」

「・・・・・フランクだ。フランク・ウェスト。」

「職業は？」

「戦場カメラマン。」

「！」には？

「ハロラド州の片田舎、ウイラメットのショッピングモールだ。・・

・どうした？ あんた、記憶喪失か何かか？」

「あの異様な人達は？」

「見て分からぬのか？ゾンビだよ。原因は分からんが、この町全體が今、ゾンビだらけになつてる。」

「・・・今、何年？」

「西暦 年だ。」

「西暦・・・？」

「お前さん、スクールにはちゃんと通つたのか？いや、通つて無いガキでもそのぐらいは分かるハズだ。」

「ここは何処の惑星？」

「は？ あー・・・地球だな。」

「地球・・・」

女性が眉根を寄せながら、目線を斜め下に落とす。その時に手の力が少し緩んだのを見逃さずに、一気に手を振り解く。女性は振り解かれても気にする風もなく、何かを考えるように斜め下に視線を落としたままだった。

俺は足元に置いておいたショットガンを拾い上げると、振り向き様に後ろのゾンビの頭を吹っ飛ばす。その光景を見ていたらしい女性が、ポツリと、一言漏らした。

「戦争・・・？」

「まあ、似たようなモンだな。ここは危ない、守衛室なら安全だ。一緒に来ないか？」

「ええ、それではお願ひします。あ、私、リア・ゲートと申します。」

「リア？ ・・・名前からしてジャーマンか？ 顔つきから俺はてつきり、ジャパニーズ辺りかと思つてたんだがな。」

「・・・すいません、言つてる事が、良く・・・。」

「ん、そうか？ ・・・まあ良い。付いて来てくれ。」

そう言つて先導するよつにして、カートを押して歩き始める。先ほどの締まり切つた口調と一転して、間延びしたような喋り方になつてゐる事には、あまり突つ込まない事にした。

程なくして、リアがゾンビに絡まれる。助けようかとも思つたが、そう思つた頃にはそのゾンビはアゴの関節と両肩関節が外され、両足の腱も切られてゐるらしく、僅かにアゴを揺らしながら、背骨の動きだけで這いざる事しか出来ない状態にされていた。そして、その哀れなゾンビの頭目掛けて、リアが思い切り踵を叩き付け、殺していた。

その手際の良さは、それこそ本物の特殊部隊の隊員とかなんじや無いかと疑つてしまふ程だつた。

「随分と慣れた手付きだな。お前さん、そういう仕事なのか？」

「ええ、傭兵をやつています。」

「へえ、傭兵？ 僕もそれなりにキャリアはある方なんだが・・・あんたみたいな美人、職場じゃ見たことが無いな。」

「あらあら～。もしかして、口説いてます～？」

「まさか。率直な感想を述べただけだ。それに、」

そこまで言つと、カートの上に載せておいた小型チエーンソーを片手で振つてゾンビに刃を刺し込み、エンジンを回してそのまま切り殺す。

「（）」じゃムードもクソも無いからな。口説くなら、もっと別の場所を選ぶさ。」「あらあら～。」

それから、俺はカートと小型ローンソーアー、リアにはショットガンを渡して、守衛室に繋がる屋上ダクトへと向う。

リアは渡したショットガンを「古風だ」とか、「使い方が分からぬ」等と言つていたが、一通りの操作を教えたら、直ぐに手足の如くに使い始めた。何でも、別の形状のショットガンとは、随分と長く付き合つていたらしい。

確かに、戦場でショットガンを運用するのは特に珍しい事では無いが、ポンプアクション以外のショットガンとは、何なのだろうか？ レバーアクションか？ それとも一銃身？ それともオートショットガンと言う奴だろうか？

そう言えば彼女、銃弾をやたらと眺めていた。そう言うマニアだと言つのならまだ分かるが、彼女のあの目は、初めて見る物を眺める時の、好奇の目のようだった。

途中、彼女がショットガンの弾を切らして素手で闘う事になつた時、中々に面白い体術を使ってゾンビを殺していた。特に気になつたのは、ゾンビの頭を地面に向けて全体重を乗せて叩き付ける技と、ゾンビの腹に入れて臓物を引き抜く技だ。

地面に頭を叩きつけて碎く技が有効なのを見るに、ゾンビと言えど頭が急所である事は変わらない事がこれで分かつた。まあ、以前からハンドガンやサブマシンガンで頭を撃ち抜いて殺していたのだが。

しかし意外だったのは、臓物を引き抜く技だ。これによつてゾンビの腸と胃が引きずり出されるのだが、これでもゾンビは動きを止

めていた。もつと言えば、死んでいた。

観察した限りだと、どうやら一定以上血液が無くなると、体を動かす事が不可能になる事が原因のようだつた。

どちらも手が酷く汚れるが、武器が無い場合でも使える辺り、非常に有用に見えた。今まではほとんど殴る蹴るだけで武器が無い時は切り抜けてきたが、今度からは俺もああ言つ事をやつてみようか。そんな事を考えながらリアの体術を眺めていると、それに気付いた彼女が、何か思いついたように話しかけてくる。

「やつてみます～？ 意外と簡単ですよ～？」

「ん？ そうだな・・・じゃ、一つご教授願おうか。」

「ええ～。まずはね～・・・」

そう言つてリアが手近のゾンビの頭を掴むと、軽く飛んで全体重を掛け、地面に思い切り叩き付ける。

「ね？ 簡単でしょ～？」

「ああ、まったく分からん。」

先ほどのを勧められて真似してみたのだが、思い切り腰を打つてしまつた。非常に痛い。倉庫を抜けると、屋上ダクトが近付く。屋上と倉庫を繋ぐ大きなエレベーターを開くと、そこには大量のゾンビが所狭しと詰め込まれていた。

毎度思うんだが、こいつらは何故、どうやってこんな所にスシ詰め状態になつているのだろうか。あ、スシバーに行きたいな。無事に帰れたら行くとしよう。

リアは目の前一杯にゾンビが居るにもかかわらず、正確に、的確にショットガンの引き金を引いて行く。六発撃ち切つた頃には、動ける状態のゾンビがほとんど居ない有様だつた。

一人で乗り込み、エレベーターの扉を閉めて、屋上へと向う。その間にリアは、また臓物を引き抜く技で残つたゾンビを殲滅していった。後ろでブチブチと音を鳴らしつつ、鼻歌混じりにゾンビをジエノサイドされるのは、中々にシユールな体験だつた。恐らく、こんな体験は一度と出来ないだろうが。

「ここが守衛室ですか？」

「ああ。今は臨時避難所だな。俺はまたショッピングモールに戻る。お前さんはここで救助を待つてくれ。」

「はい。ありがとうございました。」

そただけ言つて、リアが守衛室のセキュリティールームへと入つて行く。避難部屋へは、セキュリティールームを通らなければならぬからだ。

「ああそうだ。渡したショットガンなんだが・・・」

渡していたショットガンの事を思い出して、守衛室のセキュリティールームの扉を開ける。しかし、そこにはジェシーと氣を失っているブラッドしか居なかつた。

「どうしたのフランク？」

「いや・・・ここを誰か通らなかつたか？」

「いいえ？ それで、ブラッドの薬は？」

「ああ、持つて來たぞ。」

そう言いながら、上着のポケットの乱暴に突つ込んでいた薬を取り出し、ジョシーに手渡す。

「ありがとう、フランク。」

そう言つてジョシーが薬を受け取ると、箱を開けて説明書を読み始める。

それから、俺はどうにもあの女性が気になり、避難部屋を一つ一つ見て周る。しかし、その何れにも、あの血色の悪い女性は見付けられなかつた。

「おかしいな・・・？」

そうポツリと呟き、カメラの中のメモリを見る。そこには確かに、あの嫌に血色の悪い、東洋人系の顔立ちをした女性の寝顔が、しつかりと写されていた

「ふむ・・・今日は、俺の前からよく美女がいなくなるんだな・・・。
。」

No.9 「Welcome to hell!」（後書き）

アンケートは、三十一日まで私の我慢の限界がマッハなので、こ
こらで終了とさせて頂きます！ ご協力、ありがとうございました！
次回は今私のやる気がマッハなので早いと思いますよー。 では
では！

あ、それと。

今回登場した人物や場所について詳しく知りたいのであれば、『
デッドライジング』をプレイするか、『デッドライジング』のプレ
イ動画を視聴する事を強くお勧めします。面白いですよ！

そしてフランクさんの登場は今回限りです。きっと。多分。恐ら
く。

ちなみに、今回リアがやつた『フェイスクラッシュ』と『モツ抜
き』ですが、フランクさんがレベルアップで使えるようになる代表
的な技だつたりします。腰を打ち付けてしまったのは、きっとレベ
ルが足りなかつたからですね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1204t/>

ファンタシースターポータブル2「小さな翼と歩く悪意」

2011年11月23日16時45分発行